

536  
33

0<sup>m</sup> 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>m</sup> 1 2 3 4 5

始





原重治著

現代生活と孔子の思想

東京 弘道館發兌



原重治著

現代生活と孔子の思想



東京 弘道館發兌

大正  
14. 1. 19  
内交



今日字を習ふ  
大正十年一月一日

著者の父の筆蹟



536-33

い

現代生活と孔子の思想 目次

上 編

一 道德觀の確立……………一

二 孔子の人格……………一三

三 仁の理想……………一八

四 表現の生活(禮)……………二六

五 正義と利己主義……………三三

六 人格内容としての知識の意義及價值……………三七

七 孔子の政治觀……………四二

八 藝術家としての孔子……………五〇

九 孔子の生活と宗教……………五四

目次



二〇 孔子と教育……………五九

下編

一 人生は苦であるか樂であるか……………六九  
二 孝行は人間の至上愛である……………七四  
三 思想の醇化と言語文章及表情の純化……………七六  
四 人を容るゝこと。人を思ひやること。人の爲に働くこと……………八〇  
五 父の墓前へ……………八一  
六 用を節して人を愛す……………九〇  
七 對抗の心もちを脱せよ……………九一  
八 貧富の超越……………九二  
九 人を理解せよ。人に理解を要求するな……………九四  
一〇 哲人政治……………九五

一一 思邪なし……………九八

一二 運命と自由……………九九

一三 愚人……………一〇一

一四 人間の機械化……………一〇三

一五 思索と經驗と讀書……………一〇四

一六 先づ對者を尊敬せよ……………一〇五

一七 母の靈に……………一〇六

一八 享樂の絶頂から悲哀の谷底へ……………一〇四

一九 形式に捕はれて精神を失つてはならぬ……………一一五

二〇 最高の理想を把持するものゝみが苦樂を超越する現實の眞生活  
活を解し得る……………一二六

二一 朝に道を聞けば夕に死すとも可なり……………一二七

二二 求道の基調は最低の衣食に甘んずるにあり……………一二八



二三	永恒の象徴としての刹那……………	一三〇
二四	正義は普遍妥當的である……………	一三一
二五	徳孤ならず必隣あり……………	一三三
二六	自信、自重、自尊、自負……………	一三三
二七	慾を寡くして氣を養ふ……………	一三四
二八	人性は善であるか悪であるか……………	一三五
二九	天は善人に幸福を賜ふ……………	一三八
三〇	終りを慎しむこと始めの如くせよ……………	一三〇
三一	其言ふところは其行ふところ、其行ふところは其志すところ……………	一三三
三二	敬に居て簡を行ふ……………	一三三
三三	學ぶことの意味……………	一三三
三四	取るべきを取るは義である。與へて當を失ふは義でない……………	一三五
三五	積善の家に餘慶あり積不善の家に餘殃あり……………	一三六

三六	運命を諦視すること……………	一三九
三七	全我的の力を盡すこと……………	一四〇
三八	事業の成敗は人物にあり……………	一四一
三九	知るものは好むものに如かず好むものは楽しむものに如かず……………	一四二
四〇	幸福の要件……………	一四三
四一	中心生命を捕へること……………	一四七
四二	先づ自己に最も近き一人の自覺の爲にはたられ……………	一四八
四三	復古と創造……………	一四九
四四	夢……………	一五一
四五	藝術の核心は道徳である……………	一五二
四六	同情……………	一五三
四七	經濟の意義……………	一五四
四八	人は皆吾師である……………	一五七



四九	無抵抗主義	一五七
五〇	瞬間享樂	一五八
五一	基督教を信する友に	一六一
五二	大望心	一六九
五三	食欲と性慾	一七一
五四	人間味	一七三
五五	共産主義	一七四
五六	死	一七七
五七	批判の標準	一七九
五八	同生同死の交り	一八〇
五九	世界同胞の觀念	一八二
六〇	政治の第一要條は民衆の信を得ることである	一八三
六一	戀愛に就て	一八三

六二	團體的運動	一九一
六三	師弟の道	一九三
六四	非戰論者	二〇〇
六五	眞面目な態度	二〇五
六六	法を出で、法に合すること	二〇六
六七	東洋の生活基調と西洋の生活基調	二〇七
六八	純なる心もちを以て眞劍に討議せよ	二一〇
六九	過度の反省	二一〇
七〇	家庭的利己主義を脱せよ	二一一
七一	批評の態度	二二三
七二	小人窮すれば斯に濫す	二三四
七三	一以て之を貫く	二三五
七四	新人の言葉(二)	二二六



七五	新人の言葉(二)	二二七
七六	道德の意味	二二九
七七	貴き魂	二三一
七八	身を殺して仁を爲す	二三一
七九	獨坐のたのしみ	二三二
八〇	眞の名聲	二三三
八一	宇宙生命への合體	二三三
八二	過失を恐れるな	二三五
八三	遺傳と環境	二三六
八四	天何をかいふや	二三七
八五	運命を知ること。社會相を知ること。時代思潮を解すること	二三八
八六	道德聯盟趣旨	二三九

## 現代生活と孔子の思想

### 一 道德觀の確立

現代の社會は不安動搖してゐる。あらゆる方面に於て行詰りの状態である。經濟は行詰つてをり思想は混亂してをる。社會改造の叫びは各方面から起つて來る。社會主義や共產主義は専ら經濟革命によつて社會を改造すべく主張する。土地を公有にし一切の生産機關を共有にし私有財産を否定することによつて平和幸福の社界を創造することができると考へる。彼等はマルクス一派の唯物史觀を經典として人間の歴史を階級争闘である、經濟戦争であると觀じ人間の社會生活が全然物質に基調を置くものであると論ずる。けれども人間生活が單なる物質によつて幸福と満足とを得られぬことは富豪資産家の生活の内面に漲る悲劇暗闘を見れば



二  
わかる。孟子が曰つた如く「飽食暖衣逸居して教なきは禽獸に近し。」であつて信念なく理想なく生活の指導原理を持たぬ生活は動物生活に等しい。物質の根柢には思想がなければならぬ。

社會改造の根本は思想改善である。しかし成立宗教はもはや現代生活の指導原理たる權威を失つた。十字架の贖罪や處女降誕の奇蹟は信仰の對象となり得ない。彌陀本願の他力念佛や妙法蓮華經のお題目はもう人間救済の力を持たない。

無宗教が現代の宗教であり無信仰が現代の信仰であるさへいはれる。懷疑主義、享樂主義、虛無主義、刹那主義が唱へられダダイズムと稱して一切の概念と理想と制度と習慣とを偶像視し一切の偶像を打破して其瞬間の氣分に生きよと主張する氣まぐれな思想が流行する。しかし虛無思想、懷疑思想は之を徹底してゆけば其立論の根據が失はれる。一切の偶像を打破せよと唱へるはそれ自らが偶像であらねばならぬ。

人間を救ふものは人間自身である。自己を救済するものは自己自身であらねば

ならぬ。人間には人間の本性がある。この本性に率ふところの自然の道がある。これを自覺し、これを明かにすることが道德である。現代に於て最も急要なことは道德を明かにすることである。道德觀の確立である。

道德觀の確立は現代の信仰である。宗教である。人間を外にして神はなく神を外にして人間はない。自我の眞要求は神の命令である。善を充實し愛を擴充することは自我の根本要求であつて一面すべての慾望を統一醇化する最大の慾望であり、あらゆる本能を醇化し統一するところの最高の本能である。この自我の根本要求、最高本能、最大慾望に率ふことが即ち道德である。

人間が人間の本性に率ふ生活が道德であるが故に人間である以上すべての人間が道德家であり道德的生活をなさねばならぬ。藝術は道德を超越するとか科學は道德と關係ないとか宗教は道德の上に位するものであるとかいふ説は皆謬つた見方である。道德至上に目覺め愛の擴充を考へる場合、第一に問題となることは愛の根本は何であるか至上愛は何であるかといふことである。人間最上の愛は孝道



である。孝行はあらゆる愛の根本である。孝は父母に對する愛敬の充實である。親に事へる義務献身の態度の醇化である。知識と經驗とのベールを撤した純情の目醒である。赤子の心への復歸である。孝經に「親を愛するものは敢て人を憎まざる親を敬するものは敢て人を侮らず愛敬親に事ふるに盡し然る後に徳教百姓に加はり四海に刑る。」といはれてあるが、父母を愛敬するものは必ずすべての人を愛敬する。父母に對して義務献身の態度で事へるものは必社會の爲、國家の爲、全人類のために献身的の態度ではたらくことができる。愛は單なる理論でなく體驗であり實感である。幼少の時から家庭にあつて父母に對して我真心よりの愛敬を充實する體驗は生涯の思想信念の核心となるのである。

父母が子を愛する愛は全く本能的であつて何の努力をも要せぬけれど子が父母に對する愛は一面本能的であるが一面努力献身を以て充實してゆかなければ純粹な境地に到らない。眞の愛は必犠牲献身を以て充實せられた愛である。何の犠牲なく献身なきところに眞の愛はあり得ない。この意味に於て父母に對する義務献

身の態度の修行としての孝道は一切を愛する聖愛の基本であらねばならぬ。

ある人は戀愛を以て至上愛であると唱へる。しかし戀愛は強烈な本能であるが其根本が性慾であるからして幼少の時或は老衰の後は經驗することのできぬ愛であり且つ排他反感嫉妬怨恨等の不純なる情緒を伴ふ愛である。一個の異性の愛を獨占するため他の一切を排斥せねばならぬ心理状態が戀愛である。かやうな心もちは一切を包容せんとする理想と矛盾せざるを得ない。故に戀愛を以て至上愛と見るは謬つた思想である。等しく戀愛といふけれども女性から觀た戀愛と男性から觀た戀愛とは其意味が異ふと思ふ。女性にとつては戀愛は殆最上の愛といつてよい。女性は一個の理想的男性を發見して自己の全生命をあげて之を愛することとが最大の愛である。しかし男性は一個の女性を發見して全生命をさしげることが眞の愛でない。男性は自己の個性を發揮し自己と社會との契合點を把握し、ここに立脚することによつて戀愛を包容するところの大なる立場に眞の理想的愛があるものと見るべきである。



世界永遠の平和と全人類愛とは現代人の理想であるが、それは國際主義や無政府主義の唱へる如く、すべての國境を撤廢し政府を否定し全人類が單なる友情關係に立つて生活すべしといふやうな空想的な理論によつて實現される者でない。全世界の平和を實現するには先づ各自の屬する國家を道義的に向上せしめねばならぬ。國家を向上せしむるには先づ各自の家庭を醇化せねばならぬ。社會國家の單位は個人でなく家庭である。各人が理想的家庭を建設すべく努力奮勵する過程に於て社會の改善と國家の向上とは實現せられる。

此意味に於て理想的家庭の建設は現代青年の唯一の理想であり現代生活の指導原理であらねばならぬ。そうしてこの理想の實現の核心は親に對する愛敬の充實としての孝である。家庭の醇化は青年が父母を包容し父母を尊敬する努力精進を原動力とする。父母を排斥するやうな態度や心もちでは到底妻子を包容することはできない。父母に對する義務獻身の體驗ある青年の間に成立する戀愛は必理性の光と情操の熱とによつて美化せられた神聖な戀愛である。それは單に一時的感

情や性慾に盲動する輕薄な戀愛でなく眞に一生を通じ難苦と荒波とを切抜けて光明の彼岸に到達する貞節純潔な愛である。

人間生活の一切は人格に歸趨する。人格は一切の價値の根柢である。人格尊嚴を覺り人格の絶對價値を認識することが人間の生命である。人格價値の自覺の唯一の過程は先覺者の足跡を辿り其遺教經典を研究し體驗する事である。先覺者の遺教經典を偶像として排斥する者はコンパスを取らず定規を用ひずして方圓を畫くが如く到底眞面目なる求道者の取るべき態度でない。熱烈なる求道者は必唯一の經典を有する。

現代の青年は何を以て唯一の經典とすべきであるか。それは論語である。論語を他に於て現代青年の唯一の經典はなし。

或はいふ。論語は平凡な教訓書であり常識的な道德書であるに過ぎない。何等深遠な思想を持ってをらぬでないかと。なるほど論語は平易であり常識的の書であるに相違ない。しかし平凡であり常識的であるが故に深遠な思想を持たぬといふは



徒らに難解奇抜な語を以て高遠な哲理であると心得るのであつて單なる形骸に捕はれた見解である。眞理は平凡の裡にあり高遠な哲理は日常生活を透して體現されねばならない。此意味に於て論語は極めて平易であつて極めて高遠な人間學の書であると認められる。

現代の政治は改造を要する。それには民衆の政治的覺醒が先立たねばならぬ。政黨内閣である官僚内閣であるといふ如く單に内閣組織の形式を是非したところで政治は少しも改善されない。いくら組閣の形式が立派であつても其局に當る人物が立派でなければほんとうの政治は行はれない。プラトンは哲人政治を唱へ人生に對する徹底深刻なる愛と洞察とを有する思想家、哲人にして政治家たるの資格があるといつた。プラトンのこの立言は何處如何なる時代に於ても眞理であらねばならぬ。高德な人、人格高き人が政治の局に當るべきは政治そのもの、本質である。ワシントンが全國民の推薦によつて大統領になつた如く眞に民衆の輿望を擔うた人物が政治に携はるといふが代議政治の意味である。此意味に於て人

格政治、道德政治の思想を以て一貫されてゐる論語によつて私どもは最高の政治哲學を訓へられる。一例を挙げれば「子曰く政を爲すに徳を以てす譬へば北辰の其處に居て衆星の之に共ふが如し。」とあるが如く又「子曰く無爲にして治むるものはそれ舜か、それ何をか爲す、己を正しくして立つて南面するのみ。」とある如くいづれも政治の基調が人格の感應作用によるを示されたものである。

現代の教育が偏智主義であり資本案本位であり全く生活の手段方便と墮しつゝあることは一人も之を嘆息せぬものはない。單なる試験のための知識の詰込み以外、何の意味を持たない不自然な教育、人間性を害ふ邪なる教育を改めて自由平等の教育、自己創造の教育、人格陶冶の教育、教育そのものに意味と悦樂とを有する教育を建設せねばならぬことは何人も切望するところである。それには先づ民衆が教育の根本思想を樹立せねばならぬ。論語はこの意味に於て最上の教育哲學であるといふことができる。孔子の教育は徹頭徹尾。自由主義であり個性本位である。そこに何の束縛がなく強制がなく秘密がない。全く心情と心情との接觸、人



格と人格との融合である。故に教育それ自らが悦樂であり學習それ自らが悦樂であつた。論語の冒頭に「子曰く學んで時に之を習ふ亦悦ばしからずや朋あり遠方より來る亦樂しからずや」とあるは此意味である。門人顔淵が死んだとき孔子は之を哀しんで慟哭し「噫天子を喪せり、天子をほろぼせり。」といつて悼痛された。教育の生命とするところは思想の共鳴であり人格的親和である。此意味を徹底的に教へる書物は論語の他に求められない。

「論語は單に日常生活の實踐道徳を説くに過ぎない。道學先生の閑文字であつて結局、論語讀みの論語知らずに終つて了ふ。そんな無味乾燥な生活は現代人の耐へるところでない。現代人の生活は美的であり藝術的であるを要する。」斯ういふ意味で論語を攻撃するものもあるが、それは論語を讀まぬ人か或は孔子を誤解してゐる人々である。孔子は藝術家である。論語は藝術の眞の意味と價值とを教へる。論語に「子齊に在て韶を聞き三月肉味を知らず、曰く圖らざりき樂を爲すのここに至らんとは。」とあるが此意味は孔子が齊國に在て舜帝の音樂の韶を聞かれ

て其美に感動して三月の長い間肉の味を知らざる程であつた。そうして音樂の美の斯くまでに至らうとは思はなかつたと嘆ぜられたといふのである。音樂を鑑賞して恍惚忘我の境に入り三月食の味を知らなかつたといふ經驗を藝術的でないと誰がいひ得るか。現代の藝術家が果して孔子のやうな美の鑑賞力を持つてゐるであらうか。「子曰く詩に興り禮に立ち樂に成る」とは詩と禮と音樂とに終始する美の生活を意味し「子曰く道に志し徳に據り仁に依り藝に遊ぶ。」とは道徳を根柢として藝術的生活を建設する意味であつて愛の擴充によつてあらゆる感覺的對象に美を創造する生活を表現した言葉である。斯やうに論語は藝術の意味と價值とを明かに示してをるのである。

論語は信仰に就て何ものをも教へてをらない。現代人の宗教的要求に對して何ものをも與へないといふ非難があるが、孔子が宋に在て司馬桓魋といふ暴客のため害せられんとしたとき「天徳を予に生ず桓魋それ予を如何せん。」といはれた言葉を以て考へたらどうであるか。此言葉は單なる豪語又は自慰的な語でない。天



が必善に福し善人を助けるといふ信念、道德が天意の奉行であるといふ信仰の表現であると思ねばならぬ。福德合一の思想はソクラテスが明らかに之を唱道したところであつて、すべての偉大なる思想家、宗教家の信念であり全人類の常識の根柢をなすところの信條である。ある者は天道是か非かと叫んだり善人が禍に逢ひ不善を行つて幸福な生活を終つた事實を唱説する。しかし、これらは人生に對する皮相なる觀察、或は自我自省の切實ならざる結果であつて要するに自我の眞要求としての善の信念と體驗とを缺くが爲の懷疑思想に外ならない。自我の根本要求としての善の實踐即ち愛を擴充し醇化する行爲そのものは宇宙それ自身の必然的本質であつて天の使命の遵奉である。之が唯一の實在であり價値であり生命であり即ち道德である。これが論語の記録を通ずる孔子の宗教觀であると考へられる。要約するに現代人を救ふものは現代人の信仰である。而して道德の確立こそ實に現代人の信仰であり宗教であるのである。

正しき信仰の樹立には必唯一の經典を要する。現代に於ける唯一の經典は論語

の外に求められない。

論語は吾等日本人にとつては特に常食の米飯である。あらゆる新思想は、たとへば西洋料理や嗜好飲料の間食である。間食を貪るものは健康を害し味覺を傷ひ常食の味を失つて了ふ。先づ論語を體讀玩味して常食の眞味を覺ねばならぬ。そうして諸の間食に對する正當なる價値判斷を立てねばならない。

## 二 孔子の人格

カントは曰つた。「人格はそれ自らが目的である。如何なる場合にも人格を他の方便とし手段として取り扱つてはならぬ」と。

人格は唯一絶對の價値である。孟子が「萬物皆吾に備はる。身に反して誠なれば樂之より大なるはなし。」といひ朱子が「人は一個の小宇宙なり」といつてあるは皆人格の絶對的であることを謂うたのである。人格が絶對價値であるといふことは一面から見れば人格の獨立であり自由であり自律であることを意味する。自由自



律とは自然の法則、物理的法則を超越して自主の世界を創造すること即ち自我の向上品性の改善である。

「子曰く吾、十有五にして學に志し三十にして立ち四十にして惑はず五十にして天命を知り六十にして耳順ひ七十にして心の欲するところに從て矩を踰えず。」の學に志すとは人格に唯一の價値を認め自ら修め他を治むるを志とする事である。三十にして立つとは個性天分を發揮し社會に對する自我の立脚點を明かにする事である。惑はずとは人を知り時代を解し事に當り變に處して利害に惑はず邪説に迷はぬことである。天命を知るとは自己の最善を盡して効果を期待せぬ境涯であつて死生、存亡、毀譽、褒貶の爲に心を惱ますことなき生活である。之を主觀的に見れば天の使命の下に生活する自覺を得ることであり、所謂安心立命の境地である。孔子は「學んで厭はず、人を誨へ倦まず」といふ態度を以て十五から七十まで不斷の精進と向上とを續けられた。而して終に「心の欲するところに從て矩を踰えず。」といふ圓滿完全の人格を造就せられたのである。

人格の圓滿完全とは知情意の調和統一した状態である。孔子が「君子の道三つあり。知者は惑はず、仁者は憂へず、勇者は懼れず。」といはれてある、惑ひなく憂ひなく懼れなきは調和統一の生活である。「子曰く知者は水を樂しみ仁者は山を樂しむ。」とあるは自然と自我との調和された状態であつて「~~五~~四を絶つ、意なく必なく固なく我なし。」とある意とは利害を打算することであり必とは結果を期待することであり固とは頑固であり我とは我執であつて意必固我の無いことは洒脱玲瓏の境をいふのである。

「子の燕居申々如たり天々如たり」とあるも亦此意味であらゆる境遇に處して調和し融合し自得せられた趣を表したのである。孔子の人格は圓滿であつて亦偉大であつた。即ち博くして深き智見と高調にして純なる感情と死生の際にも動ぜぬ強固な意志を備へてをられた。

「知者は惑はず。」と曰はれてある知とは人物を知るの明と社會人事に處する識見と自然現象を解釋する知識とを包含するのであつて現代に於ける科學を包容した



哲學人生觀を意味するものと見るべきである。

「予喪あるもの、側に食すれば未だ嘗て飽かず。」  
 「厩焚けたり子朝より退きて曰く人を傷へりやと、馬を問はず。」  
 「朋友死して歸するところなし、曰く吾に於て殯せよ。」  
 等の文を見れば一切の人間を自己の兄弟の如く感ぜられたことが想はれ、孔子郷黨に於て恂々如たり、言ふこと能はざるもの、如し。  
 「迅雷風烈には必變ず。」  
 「顔淵死す、子之を哭して慟す。」  
 等を讀めば孔子が少年のやうな若々しい氣分と敏感な神経の持主であつたことが察せられる。

又子、人と歌つて善ければ必之を復せしめて後之と和す。  
 「子齊に在て韶を聞き三月肉味を知らず。」  
 子曰く師摯の始、關雎の亂り洋々乎として耳に盈てるかな。  
 の文によつて孔子の音樂鑑賞の態度と高尚優雅なる情操とを知ることができる。  
 斯の如く孔子の人格は圓滿にして偉大であつた。そうして政治教育藝術の各方面に亘つて豊富な生活と高調な活動をされたから時人は孔子を目して生れながらにして知るところの天才であるとした。しかし孔子は自ら天才を以て居られな

つた。「我生れながらにして之を知るものに非ず、古を好み敏にして之を求めたるものなり」といひ「文は吾猶人の如くなることなからんや躬君子を行ふは吾未だ之を得ることあらず。」といはれ道を求めて努力精進すること老境に至つて愈熾であつた。そして「憤を發して食を忘れ樂しんで以て憂を忘れ老の將に至らんとするを知らず。」と告白され「朝に道を聞けば夕に死すとも可なり。」と奮勵されたのである。

④ 自由平等は現代人の標語であるが、それは才能知識又は單なる物質生活の自由と平等とを意味するでない。自己の人格を圓滿にし偉大にするための機會均等を謂ふのである。

⑤ 教育の機會均等政治に於ける選舉權の普及の如きも歸するところは人格を唯一の價値と認め人格向上の爲めの機會均等の要求に外ならない。

⑥ 吾々が人格に絶對價値を認めて向上の一路を辿り自己の理想とし標的とすべき人格者を求めるとき吾々は孔子の人格を敬仰し孔子の生活に模倣し追隨せねばな

last



らぬことを信ぜられる。

### 三 仁の理想

仁は孔子の生活と人格とに體現された人生最高の理想である。之を抽象的にいへば愛を無限に擴充し善を無限に徹底するはたらきである。程子は「仁者は天地萬物を以て一體となす。」といつてゐる。天地萬物を以て一體となすとは一切を包容する態度であり一切を自我の顯現と見る心もちである。利己的態度と排外的の心もちとは萬物一體の境に到る所以でない。「有外の心は以て天心に合するに足らず。」とはこの意味をいつたのである。

釋迦の慈悲、基督の博愛、孔子の仁は常に異名同體の理想であると見られてゐるが其内容に至つては仁は慈悲博愛と根本的の相違あるを知らねばならぬ。

佛教の慈悲は無常觀、空寂觀に立脚する消極的生活を根柢とする愛である。釋迦は生者病死苦を厭うて解脱を求め十二年の難行苦行によつて涅槃の境地を開拓

した。そこから發したものが慈悲の理想である。

基督は現世を罪惡とし理想を未來世の天國に置き天國に至るの準備として博愛を説いたのである。いづれも現實生活を否定的悲觀的に觀て社會的秩序と差別相とを撥無し自他平等觀を主張する點に於て同一である。

實在の意味は統一發展である。統一發展の實相は分化であり差別である。分化を離れて統一なく差別を離れて實在はない。平等とは差別に即し差別を醇化する上の平等である。差別を撥無しして平等を打立てんとするは不自然であり惡平等觀である。

既成宗教はかゝる惡平等觀に立脚するが故に無我を唱へて却つて我執を強め他力救済を求めて利己主義に墮するを覺らず往々異教徒を迫害し仇敵視して憚らぬ如き矛盾を敢てするのである。

仁は現實生活を肯定的、積極的に觀て、もろくの差別そのものを愛の顯現と認めるのである。即ち親子の愛、夫婦の愛、兄弟朋友の愛、社會人類の愛、郷土の



愛、母國の愛、自然に對する愛の如く一切の差別相を愛の分化發展であると觀て、この差別相に立脚して近きより遠きに、小より大に、擴充し醇化して遂に萬物一體の愛に到らんとするのである。一切を肯定的積極的に觀ることは一切を生命の發展と認め死を生の一現象と觀る立場であり従つて生活を善の向上と認め惡を以て善の一變態であると見るのである。この立場は死と罪惡とを唯一の問題として解脫救濟を求むる既成宗教とは明かに區別されねばならぬのであつて仁と慈悲博愛との内容の相違は此處にあるのである。

抽象的にいへば仁は愛の擴充、善の徹底としての無限の向上であるといふ言葉に盡きてゐるが故に、仁とは何であるかといふことよりは如何にして仁を求むべきかと第一の問題であらねばならぬ。富士山頂の光景と氣分とは登山したものでなければ到底味ふことはできない。書物で讀んでも人から聞いても、それは單に想像に止まるのである。故に先づ登山の志を定めて一步を踏出すことが急務である。子曰く朝に道を聞けば夕に死すとも可なり。」とはこの志と決心とをいふの

であつて「君子は食を終るの間も仁に違ふことなく造次にも必此に於てし顛沛にも必此に於てす」とは仁を追求する態度を表したのである。

孔子の説かれる仁の内容は對者と時と處とによつて其趣を異にしてをつて單なる形を以て論ずれば往々矛盾衝突する場合が無いでない。

「子曰く仁遠からんや吾仁を欲すればこゝに仁至る」とある如く自己の生活がそのまゝ仁である。仁は必しも高遠な理想でないと言われる反面に於ては「子曰く聖と仁との如き則ち吾豈敢てせんや、抑も之を爲して厭はず人を誨へて倦まず即ち爾云ふといふべきのみ。」といはれて仁は到底自分の企て及ぶところでない。吾はたゞ學んで厭はず人を誨へて倦まず事を能くするに過ぎないと説かれて居る。

一方に於て子路冉求等の門人に仁を許されぬ。子曰く回や其心三月仁に違はず其餘は則日月に至らんのみ。」とあつて顔淵にさへ其心三月仁に違はずといふ程度で仁を許されてゐるにかゝはらず、子貢の問に對して齊の管仲を仁であるといはれてゐる。管仲は覇者の佐として孟子の如き痛く之を排斥してゐる。孔子も或時



は管仲を評して禮を知らず儉ならずとしてをるが、時としては「管仲桓公に相として諸侯に覇たり天下を一匡す、民今に到るまで其賜を受く、管仲微りせば吾をれ髪を被り衽を左にせん」と曰はれてをる。原憲が「克伐怨欲行はれざる以て仁と爲すべきか。」と問うた時孔子は「以て難しと爲すべし仁は則ち吾知らざるなり。」と答へられた。人に勝つて權勢を振ふこと、功に伐り善に誇ること、人を怨み忿ること、利慾を貪る如き行爲のないことは實に能くし難いことである。しかし仁は單に消極的、禁欲的、制遏的努力でなく寧ろ積極的に愛を擴充し善を徹底して行く生活である。慾望、本能は之を禁遏すべきでなく之を善導し醇化すべきである。この意味で仁はあらゆる本能を統一し、醇化し、向上せしむるところの人間最高の本能を満足させる生活であると見るが適當である。

「子貢問て曰く、如し博く民に施して、よく衆を濟ふことあらば如何、仁といふべきか。子曰く何ぞ仁にとどまらん、必や聖か、堯舜もそれ猶之を病めり、それ仁者は己立たんと欲して人を立て己達せんと欲して人を達す、よく近く取り譬へ

て仁の方といふべきのみ。博く人類を救濟する如き大事業は聖賢にして帝王の地位にある場合でさへ仲々難しいことである。されかといつて社會の爲にも國家の爲にも盡さぬのは利己主義に墮するものである。自己が充分人を救濟し得ると確信し、これで満足であると自信するまで人の爲に盡してはならぬといへば或は終生、人の爲に盡す機會がないであらう。それでは仁といふことはできない。故に自己が自覺せんと欲しては先づ人を自覺せんと力め、自己が道に達せんと欲しては先づ人を達せしめんと努めることが最も仁に近い態度である。

顔淵が仁を問うた。孔子いふ。己に克て禮に復するを仁となす。よく一日己に克て禮に復すれば天下仁に歸す。仁を爲すこと己れに由りて人に由らんや。顔淵が其細目を問ふ。孔子曰ふ「禮に非れば視ること勿れ、禮に非れば聽くこと勿れ、禮に非れば言ふこと勿れ、禮に非れば動くこと勿れ。」

克己復禮とは利己主義に打克つて敬虔的態度を保持することである。視聽言動を禮法に合せしむることであり自己を他人及社會と調和し融合せしむることであ



り、生活の美化である。人格に絶対價値を置き自我生活の美化を以て唯一の目的とする活動は、その一日一日が創造であり生成である。自己を支配し得ることは一切を支配し得る意味であつて即ち天下仁に歸するわけである。仲弓が仁を問ふた場合孔子は「門を出ては大賓に接する如く民を使ふには大祭に承る如くせよ。己の欲せざるところ人に施すこと勿れ。家に在ても怨みなく邦に在ても怨なし。」と答へられ、司馬牛の問に答へては「仁者は其言を詘す。」といひ輕忽に言語を發せぬ意味を訓へられた。司馬牛が「其言を詘する、これ之を仁といふか。」と反問したので「之を爲すこと難し、之をいふこと詘するなきを得んや。」即ち仁者は言行一致であると答へられた。

斯様に、「孔子の仁の説明は門人によつて各異つてゐる。其人の性格と境遇とに従つて臨機應變の教訓を與へられたものであるが、之を輪廓的に定義すれば仁は世界全人類の親和、融合、向上の理想であり、その實現の過程として各の國家を平和にし各自の家庭を改善するはたらきである」と見られる。

「孟子が「天下の本は國にあり、國の本は家に在り。」といつたのは、この思想に外ならない。家庭を改善することは社會を改善し全世界を平和にすることの基礎である。家庭を改善する唯一の原動力は、親に對する愛敬の充實としての献身的態度の生活即ち孝道の體驗である。有子はこの意味を表現して「其人と爲りや孝弟にして上を犯すことを好むものは鮮し、上を犯すことを好まずして亂を作すを好むものは未だこれあらざるなり。君子は本を務む、本立ちて道生ず、孝弟はそれ仁の本たるか。」といはれた。人類文化を沮止し人間を禍すること革命戰亂より大なるはない。而して革命戰亂の原因は權勢慾の跋扈であり權勢欲の増長は源を家庭生活に發する。孝道は父母に對する純粹なる義務の奉仕によつて我利權勢を脱却する修業であるからして共榮共存の理想たる仁の本は孝道であらねばならぬ。父母に對すると他人に對すると、其形式と方法とは異なるけれども、自己の主觀的態度に至つては同一である。即ち自我の知識と經驗との全部を盡して對者のために謀り、自己の心もちを内省して對者の情を忖度推察するより外に愛を擴充す



る道はない。この態度を忠恕と名づけられる。

④孔子が曾子に向つて「參よ我道一以て之を貫く」といはれたとき、曾子は「唯」と答へて之を了解し、更に之を説明して「夫子の道は忠恕のみ。」といはれてゐる。又子貢が「一言にして終身之を行ふべきものあるか。」と問うた答は「それ恕か、己れの欲せざるところ人に施すこと勿れ」であつた。

要するに、仁は全人類を包容する最高愛の理想であつて之が實現の過程は國家の改善であり家庭の醇化である。之を抽象的にいへば愛の擴充であり善の徹底であり之を具體的に見れば孝道の體驗であり忠恕の實行であると解すべきである。

#### 四 表現の生活(禮)

吾々の生活は内面的に見れば、もろくの要求であり外面的に見れば、その表現としての動作である。要求があれば必表現がある。要求は内容であり表現は形式である。内容と形式とは不可分離のものである。中に誠あれば外に形はる。」

といふ如く正しき要求は必正しき表現を伴ふ。要求が醇化されれば表現も亦醇化される。表現が醇化されれば要求も從て醇化される。要求と表現とは交互的の關係をもつてゐる。故に精神の緊張を保つには身體の肅整を要する。内生活の調和解放を欲すれば外生活を節制檢束せねばならぬ。

人間の要求は、個人的であると同時に超個人的であり、共通性を持てる。從てその表現も亦普汎的、一般的の形式を有する。この生活の普汎的形式を禮と名づけるのである。

故に禮は自我自身としては、慾望の節制、調和、統一であり他人に對しては融合、親和、謙讓である。換言すれば、禮の内容は個人の起居動作及び冠婚葬祭の儀式の一切と社會の風俗、習慣、制度、法律の全體を包含するのである。

「有子曰く禮はこれとを以て貴しとなす、先王の道これ美たれども小大これによらば行はれざるところあらん。和を知て和するも、禮を以て之を節せざれば亦行はるべからざるなり。」とあつて禮は單に形式的に生活を束縛するが爲でなく社會



の親和融合を貴ぶのである。故に儀式作法の如きは、時代と場所とに應じて取捨し變更すべきである。先王の制定された禮法は美であるけれども小大悉く之に由れば或は時代錯誤で行はれぬ場合が無いでない。しかし禮の精神が親和にあるから形式に拘泥する要はないとして全く作法制度を無視したならば社會の融和を保つことはできない。社會は時代と共に制度組織を改善する必要があるが、歴史と習慣とを度外視するは謬想である。

孔子の時代にあつて、一方には禮に對する妄信崇拜が行はれた。所謂禮儀三百、威儀三千といふ如く一切の起居動作を綿密なる作法によつて束縛する繁文褥禮の弊風があつた。他の一方には此反動として全く禮法を無視し形式を打破せんとする老子一派の過激主義が唱へられた。

孔子はこの兩派の思潮の間に立て中庸の態度を取つた。繁文褥禮の形式萬能は不可であるが全く禮法を打破せんとする過激思想も亦誤謬である。人間生活には是非ともそこに客觀的の秩序と制度がなければならぬ。禮儀がなければ社會は成

立たない。しかし徒らに禮の形式に没頭して其本質を忘れてはならぬ。禮の根本意義を明らかにして時代と人情とに適應した制度を建てるのが肝要であると孔子は考へた。故に林放が禮の本を問うたとき「大なるかな問や、禮は其奢らんよりは寧ろ儉せよ。喪は其易めんよりは寧ろ戚めよ。」と訓へられ又「禮といひ禮といふ、玉帛をしもいはんや、樂といひ樂といふ、鐘鼓をしもいはんや。」人として仁ならずんば禮を如何、人として仁ならずんば樂を如何」といはれ禮の本質が儉讓であり親和であるを明かにされた。

禮の本質を明かにすると共に實行方面の取捨折衷が最も重大事業である。故に孔子は禮の建設の爲に杞に行き宋に行きて夏殷の禮を研究されたが文献の足らざる爲に之を捨て、周禮を取り周道の復興を以て自ら任せられた。周は二代に監みて郁々乎として文なるかな吾は周に従はん」とは此意味である。子曰く甚しいかな吾衰へたるや久し、吾、復、夢に周公を見ず。」とは孔子が壯年時代に周道を興隆せんと志す熱烈の餘り、常に周公を夢みられたが、道行はれず齡老て周公を夢



みぬやうになつたのを嘆ぜられたのである。

禮の本は天に出て、人に成るとある如く、欲望は欲望それ自身に調節があり制限がある。本能は本能そのもの、中に醇化統一の要求がある。禮は單に作爲や虚飾でなく人間性の自然に根して、あらゆる欲望と本能とを調和し統一して生活を美化せんとする最高の欲望であり、本能であり、必然的要求としての努力である。故に禮は生活の藝術化であり、自己改造、自我創造である。此意味に於ける一日の努力は一日の創造であり、一日の建設である。

「顔淵仁を問ふ。子曰く己に克て禮に復るを仁となす。よく一日己に克て禮に復れば天下仁に歸す。仁を爲すこと己に由りて人に由らんや。顔淵曰く請ふ其目を問ふ。子曰く非禮視ること勿れ非禮聽くこと勿れ、非禮言ふこと勿れ、非禮動くこと勿れ。顔淵曰く回、不敏と雖も請ふ斯語を事とせん。」

王陽明はいふ。「山中の賊に勝つは易く心中の賊に克つは難し。」と己に克つは一切に打克つことである。克己は人生唯一の事業であつて眞の愛と眞の善とはこゝ

に根さねばならぬ。「天下仁に歸す」とは一切が自己建設の材料であり自己成長の養料となるの意である。自我人格に唯一の價値を認め、視聽言動をして自己統率の下にあらしむる生活にとつては、あらゆる境遇と事件と現象とが悉く自己成長の養料である。自己檢束は眞の自由解放への道であり、放縱は衝突、束縛、不自由の因である。

「子曰く禮を學ばざれば以て立つことなし。」子曰く詩に興り、禮に立ち、樂になる。「内生活を解放して社會生活の獨立的地歩を獲しむるものは禮である。

仁と禮とは不可分離の者であるが兩者の意味を比較して論ずれば仁は内容に屬し、禮は形式に屬する。故に先後本末を以ていふ場合には仁が本であり禮は後であらねばならぬ。「人として仁ならずんば禮を如何。」といはれたのはこの爲である。「子曰く巧言令色鮮し仁。」言語顔色の表現に専らであれば人格を傷ける。「子曰く剛毅朴訥、仁に近し。」外貌言語を飾らぬのが却て人格者の態度である。



## 五 正義と利己主義

正義と利己主義とは相反した立場に立てゐる。吾々は日常生活に於て往々正義であるか利己主義であるかといふ疑問に逢着する。そうして右せんか左せんか、甲を取らんか、乙に就かんかといふ岐路に立たせられる。

正義と利己主義とは、通常の場合、一見明瞭であり、吾々は殆無意識的に正義を發見し得るが時としては事情の極めて錯雜紛糾して、遽かに正邪善惡の判定し難い事件に遭遇する事がある。此場合、多くの者は一定の標準を持たない。善惡は相對的である。善があるから惡があり、惡に對して善があるのであつて、究極の處に至れば善もなく惡もなく虛無空寂である。何が正であるか邪であるかは、時と場合とによるのであつて、客觀的標準のあるわけでない。要するに各自の主觀的判斷に任せるより外致し方は無いと懷疑論者は唱へる。有鳥某といふ文士が人妻と情死した。彼はその遺書の中に自分等の行爲を姑く世の習慣や因襲を離れて觀てくれ

と認めた。有鳥は文學に興味を有する青年男女の崇拜する小説家であつた。彼は情に厚い人間であつて、小作人の爲に自己の所有する農場を開放したことがある。數年前愛妻を失つて以來三兒を相手に寂しい生活を續けて來た。そうして遂に人妻と情死する悲劇を演ずるに至つた。此事件に就て、一方には藝術的の死である。愛の理想に殉じたものであると讚美する者があり、他の一方には不義破倫の行爲として罵る者がある。之に對する批評が區々であつて歸一するところがない。有鳥の性格に美なる者があり彼の文學に賞讃すべき者がある、そして彼が數年孤獨の生活を續けたといふ點に於て彼に同情するは然るべきであり、彼の死を見て今更追慕の念を禁じ得ぬ者のあるは固より怪しむに足りない。しかし彼に對する同情と彼の死に對する批判とは自ら別でなくてはならぬ。批評の内容が區々であつて統一しないとしても有鳥が暗夜人目を忍んで山中に縊死したといふ一事は、彼の中心何等かの忍びざる者があり、疚しいものがあり、恐れるものがあつたことを明かにするに足りてゐる。これ彼の中心耿耿として打消すことのできない正義の準



繩であつて、いくら因襲を打破し習慣を超越すると稱しても自我一片の良心を欺くことはできない。自我良心の聲即ち自我真要求の叫びである。自我真要求の根柢は超個人的であり普遍的である。故に良心の命令は即ち神の命令に外ならぬ。吾が良心の聲に耳傾ける時、そこに正義が認識され善が認識される。従て正義と善とが普汎的標準を有する事及び善と正義とが絶對的價値であることが認められ、而して善と惡とに同一の價値を置かんとする相對論から脱することができぬ。

「子曰く君子は義に喻り小人は利に喻る。」「義に喻る」とは正義と善とに絶對價値を認めること即ち人格に唯一の目的を置いて物質を使役することである。「利に喻る」とは物質を唯一の目的として人格を方便とし物質の奴隸とすることである。換言すれば正義とは動機の純粹と事の過程に於ける一歩々々の活動それ自らに價値を置くことであつて、利己主義とは事の結果に於ける感覺的快樂を唯一の目標として動機の純不純と他の迷惑とを顧りみざることである。

正義は物質を驅役する力である。故に終局の大利は常に正義に歸する。利己主

義は快樂に耽溺して失望落膽を繰返し常に不安憂愁を免れない。故に孔子は「疏食を飯ひ水を飲み脰を曲げて之を枕とす。樂亦真中にあり、不義にして富み且つ貴きは我に於て浮雲の如し。」といはれ、利己主義の生活の空虚なるを誡められた。仁と義とは一體兩面の關係をなしてゐる。仁は平等愛の方面であり義は差別愛の方面である。平等愛は差別愛の醇化徹底によつて得られるのであつて差別愛を無視して直ちに平等愛に至らんとするは人間性の自然に逆ふ行き方である。故に既成宗教が父子夫婦兄弟朋友の如き人倫の差別秩序を捨て、直ちに絶對者と自己との交渉を説き無我愛を主張する如きは正義を無視した平等觀であつて一種の利己主義に墮するものに外ならない。

愛の擴充徹底は對者の性格と時處とに従つて其態度方法を異にすべきであり、同一人に對する場合でも其境遇により氣分によつて應病與藥の權がなくてはならぬ。時としては撫でることが愛であり、時としては鞭つことが愛である。眞の愛は對者をして悦んで勞せしむることであり、忠は對者をして好んで正義に趨かし



むることである。「子曰く之を愛してよく勞せしむることなからんや、忠にしてよく誨ゆることなからんや。」とはこの謂である。

正義を以て人に對すれば損せしめて怨みられず、利己主義を以て人に對すれば人を利して猶人の怨を受ける。「利に依りて行へば怨多し。」である。斯様に正義はあらゆる體驗と思索とを経て無心に向上し充實されるのであるから、易には「精義神に入る」と記して日常實生活を醇化して精微の極に至れば神秘の境に入るところを示されてゐる。故に孔子は「義を聞いて移る能はず、不善改むる能はざる、これ吾憂ひなり。」義を見て爲さざるは勇なきなり。」といはれ義の特に重んずべきを明かにされてゐる。

孟子には「仁は人の安宅なり、義は人の正路なり。」とあつて、仁と義との關係を安宅と正路とを以て譬へられてある如く、正義の觀念を精微にし徹底するでなければ眞に全人類愛の理想たる仁を實現することはできない。正義の徹底は差別愛の醇化即ち日常人倫道德の向上である。國境を撤廢し家族生活を打破して直ち

に理想的世界の建設を夢みるものは正義を解し得ぬ輩である。

## 六 人格内容としての智識の意義及價值

吾々が外界又は自我自身を對象化するにたらしきは認識即ち智識である。智識の内容に二種の區別を立てることができる。一を絶対智と名づけ一を相對智と名づける。

絶対智とは先天的であり超經驗的であり超個人的である智を意味し相對智とは絶対智の分化し發展して行く過程として對象と對象との關係を組織立てる智識即ち經驗的後天的の智を意味する。眞善美の認識の根柢は絶対智に屬し科學の認識は相對智に屬する。

吾々の前面には常住二つの問題が横つてゐる。一はあらゆる客觀(外界と自我)の本質は何であるかといふ問題であり一は客觀の表現は如何にあるべきか又は自我は何を爲すべきかといふ問題である。前者は現實の眞相を明かにせんとする科



學であり後者は理想の究竟に到らんとする哲學である。

科學は各自の立場から實在の一面を組織立てんとする努力であつて、一場の科學は相寄り相合して宇宙の真相を究明するを終局の目的とする。

科學の立場は一個の假定である。立場を異にすれば解釋も自ら異らざるを得ない。故に實在の本質は何であるかといふ問題は相對的であり蓋然的である。

何であるかといふ問題をきりつめて行けば如何にあるべきかといふ問題に到着し何を爲すべきかといふ問題に到達する。

例へば人間は何であるかといふことは人間は如何にあるべきかといふことを意味し更に之を推究すれば自我は何を爲すべきかといふ問題に歸趨する。自我は何を爲すべきかの問題は善を認識する絶對智の發展によつて解決される。善を認識する絶對智の發展とは善の實行徹底であり愛の擴充であり人格の向上完成である。

故に人格の向上は一切を包容する愛の擴充である。一切を愛する生活は一切を

美化し一切を包容する要求は、一切の現象を組織立て統一づけずには止まない。一切を美化するは藝術の發展であり一切を組織化するは科學の發展である。

「子曰く里は仁を美となす撰んで仁に居らずんば焉ぞ智を得ん。」とは仁即ち人格向上に絶對價値を置くことが智の發展であるといふ意味である。

「子曰く仁者は仁に安じ知者は仁を利す。」とは愛の擴充が生活の最高價値であることを知るものが知者であり愛の擴充に安んずる生活が仁者である。即ち智の至りは愛であることを意味するのである。

「子曰く智者は惑はず。」とは絶對智の充實としての哲學に立脚する智者はあらゆる人事と自然現象とを正當に批判し評價するが故に一切の境に處して迷ふことがないといふことである。

すべては相對的である。絶對的といふ如きものは有り得ないと説くものがある。しかし相對をして相對たらしむるものは絶對者であらねばならぬ。單なる相對論は虛無論や懷疑説と同じく立論の根據を失ふものである。



吾々は全自我の要求として絶対者を憧憬し永恒を希求し眞理を翹望する。此意味に於てもろくの醜を包容する美と、もろくの誤謬を訂正する眞と死を超越する生命とは吾々の要望の對象たる絶対者であらねばならぬ。而してすべての禍とすべての害悪と、すべての苦惱とに打勝つところの感謝悦樂の生活は善の理想の追求である。

「子曰く智者は惑はず仁者は憂へず。」君子は坦にして蕩々なり。」とは此境地であると見られる。

絶対智は相對智と矛盾するでなく亦相對智を否定するでないが善の認識、善の體驗としての絶対智と單なる原因結果の法則を以て客觀を組織立てる科學の如き相對智とを同一の價値に置くことは妥當でない。故に孔子は「多く見て之を識るは知の次なり。」と曰ひ相對知の根柢に絶対知のあるを認められ又「吾知ることあらんや知ることなし。」と曰つて相對的智識に執着せぬ意を明かにされた。

「子曰く由よ汝に之を知るを誨へんか。之を知るを之を知るとなし知らざるを知らずとせよ。これを知れるなり。」とは相對的知識の限界を示し自己一個の知識が極めて微小であり又知るべきことゝ知る必要なきことゝを辨別し多知博識を銜ふの非を警められたものである。

嘗て孔子が子貢に向つて「賜や汝吾を以て多く學んで之を識るものとなすか。」と問はれた。子貢が「然り非るか。」と答へた時、孔子は「非るなり吾一以て之を貫く。」と曰はれた。則ち單なる多知博識は自己を造る所以でない。仁の理想の追求を以て一貫するが眞の生活であるといふ意味である。曾子はこの一貫の義を解していふ「夫子の道は忠恕のみ。」と「忠恕」とは自我の全部を盡して人の爲に働くところの體驗である。

全自我を盡すところの體驗は價値の創造であり價値の創造は認識の根柢である。

換言すれば知識の根柢は價値であり價値の源は愛である。愛は人格内容の全部であつて科學的知識は愛の擴充の一部面である。故に單なる科學的知識の蓄積に



没頭するは人格價値を低下せしむる所以である。

## 七 孔子の政治觀

社會を離れて個人の生活は無い。個性の一面は普遍性である。

自覺とは自己と社會との契合點、接觸點を發見してこゝに立脚して自己の天分を發揮し天職を盡すことである。

自我の改善向上の過程には必然、社會の改善向上があらねばならぬ。社會の幸福を増進する努力を外にして自己を幸福ならしむる途はない。

自尊、感謝敬虔の眞意は人類文化に貢献する生活に依て體得される。伊尹は湯の幣聘に應じ田園生活を捨て、宰相となつた。彼は斯く宣言した。「天の斯民を生ずるや、先知をして後知を教へしめ先覺をして後覺を覺さしむ。吾は天民の先覺者なり、我將に斯道を以て斯民を覺さんとす。」と伊尹の態度と宣言とは單なる豪語や慢心でない。眞に敬虔の態度であり勇らしき宣言である。

大學に「明德を天下に明かにせんと欲するものは先づ其國を治め、其國を治めんと欲するものは先づ其家を齊へ、其家を齊へんと欲するものは先づ其身を修む。」とある如く自修の一面は治人であり、自我人格の向上は社會改造の内面化である。此意味に於て、人間は何人も政治本能を備へてをる。しかし人には各個性天分の相違があり、能あり不能あるは自然の勢であつて、すべての人間が悉く政治の局に當ることはできない。

孟子が「或は心を勞し或は力を勞す。心を勞するものは人を治め、力を勞するものは人に治めらる。人を治むるものは人に養はれ、人に治めらるゝものは人を養ふは天下の通義なり。」といはれたのはこの意味である。

治者もなく被治者もなく、全く權勢と利害とを超越した理想郷は、無限の未來世に於て待望せらるべき社會である。この現實に即して一步々々建設せらるべき理想的社會は到底、政治を離れ治者、被治者の秩序を無視して考へ得べくもない。

自我向上と社會生活と政治とは一體不離の關係をなしてゐる。これは孔子の思



想が他の宗教家、思想家等と異なる點であつて、仁の理想が克己忠恕による愛の擴充に立脚して道義的國家、理想的世界の建設を目的とするはこれが爲である。

孔子は仁の理想を實現せんとして進んで政治の局に當るを求められた。專制封建の當時にあつて社會改善の唯一の途は、先づ諸侯に事へて君の心を正しくすることである。故に孔子は七十二君に游事して席暖なるの違がなかつた。

「子禽、子貢に問て曰く夫子の是邦に至るや必其政を聞く。之を求めたるか、抑之を與へられたるか。子貢曰く夫子は溫良恭儉讓以て之を得たり。夫子の之を求めたるや、それこれ人の之を求むるに異なるか。」

孔子が國政に携はるを求めたのは、他の政客が權勢の爲利慾の爲に好んで政治に趨いたのと異つて、中に燃ゆる愛の理想と信念とが發して社會改造としての政治に表現されたのである。故に其態度は溫良恭儉讓であつて聊かの主角なく野心がなかつたのである。孔子の政治は哲人主義であり徳治主義である。

「子曰く之を道くに政を以てし之を齊ふるに刑を以てすれば民免れて恥づること

なし。之を道くに徳を以てし之を齊ふるに禮を以てすれば恥あつて且つ格し。則ち専ら法律と刑罰とを頼まず、人格と禮儀とによつて民俗を改善せんとする主旨である。威壓手段によらずして羞恥心に訴へんとする行き方である。故に「政を爲すに徳を以てすれば譬へば北辰の其處に居て衆星の之に共ふが如し。」と曰はれて崇高なる人格者が政治の局に當つたならば北極星が其地位に靜止して衆星が之に歸向する如く煩瑣なる法律命令を用ひずして政策が徹底するを示してゐる。

「子曰く無爲にして治むるものはそれ舜か、それ何をか爲す己を正しくして立つて南面するのみ。」とは孔子が大舜の施政を評した言葉であつて、中庸に「政を爲すは人にあり人を採るに身を以てす。」といはれる如く、爲政者が民衆の模範たるべき生活をしたならば、人材は自ら朝廷に集り、無爲の感應によつて平天下の效を見ることが出来る。專制政治の時代にあつて明君が出現した場合に最も理想的政治の行はれたのはこれが爲である。

政の極は政無きに至つて即ち完全なる自治に達するのである。自治の基本は家



族生活である。

「或人孔子に問て曰く子奚ぞ政を爲さざる。子曰く書にいふ。孝かこれ孝に兄弟に友に政有るに施す。これ亦政を爲すなり、奚ぞそれ政を爲すとせん。」

一家を治むると一國を治むると、其精神に於て其態度に於て異るところがない。家に在て父子兄弟の間を圓滿に生活してゆく力は國家を統治する力と同一である。齊の景公政を孔子に問ふ。孔子對て曰く君々たり、臣々たり、父々たり、子々たり。公正なる社會的秩序を維持するは爲政者の最も努力せねばならぬ點である。

國家は各固有の歴史を持つてゐる。歴史を離れて國家の理想なく將來のないことは個人の履歴を離れ過去經驗を抹殺して自我の現在なく將來なきと同様である。

國家社會の單位は個人でなく家庭である。個人は單獨孤立の生活を營むのではなく亦漠然と社會生活をするのでない。個人とは家庭の一員としての個人であり社會生活とは家族生活を通じての社會生活である。父子の愛は一切の愛の根本である。家族の擴大されたる國家組織にあつては君臣の間柄は父子の親みを以て推

すべきものである。斯の如き國家生活にあつては義務の充實があつて權利の主張を要しない。君は君の義務を盡し臣は臣の義務を盡し父は父の義務を全うし子は子の義務を全うす。一切の問題はこゝに至つて圓滿に解決される。

政治の要は民心の根本的改善向上である。それは歸するところ道德的感化に俟つの外はない。綱紀肅正は單なる手段方便で出来ることでない。大なる忍耐と時間とを要する。

「子張政を問ふ。子曰く之に居て倦むことなく之を行ふに忠を以てす。」「子路政を問ふ。子曰く之に先んじ之に勞せよ。益を請ふ。曰く倦むこと勿れ。」

「子夏莒父の宰となり政を問ふ。子曰く速ならんことを欲する勿れ。小利を見ること勿れ。速ならんことを欲すれば則ち達せず小利を見れば則ち大事成らず。」

地位權勢を恃んで自ら尊大にするは爲政者の通弊である。親は甘んじて子の忠僕となるところに親としての偉大があり、爲政者は喜んで民衆の忠僕となるところに爲政者としての偉大がある。



蘇東坡曰く「民を見ること子の如く其至愚者を待つこと至賢者の如くす。これ之を至誠といふ。至誠は近效なし。要は自ら信じて惑はざるにあり」と。

中庸に「其人存すれば則ち其政舉り、其人亡すれば則ち其政息む」とあつてすべての事業は人物によつて興廢するのであるが、殊に政治は人材を得ること適材を適所に置くことを生命とせねばならぬ。

「子游武城の宰たり。子曰く汝、人を得たりや。子游曰く澹臺滅明といふものあり行くに徑に由らず、公事に非れば未だ嘗て偃の室に入らず。」爲政者が哲人であり人格者であつたならば國家は平和であり社會は幸福である。專制政治の時代にあつし一たび明君の現れた場合には人材登用の理想が實現され所謂、賢者上にあり能者位にあり下に怨嗟不平の聲がなく、あらゆる善政が施される。

之に反して暴君が位にあれば奸佞の小人物が朝廷に充滿して私慾邪知を逞らし、民衆は爲に塗炭の苦を免れない。明君の現れるは極めて稀であつて批政は常に行はれ易い。民衆はこゝに於て立憲政體を建設し、代議政治を創造した。

議員選舉は人材登用の一形式である。選舉權の普及は、國民の大多數の意見が議會に表現され、人格に絶對價値の認められるところに眞意義を有する。

民衆が人格價値に立脚して各自の選舉權を行使したならば政治は理想的に行はれる。民衆が情實に驅られ、物質に眩惑して選舉權を濫用するならば、代議政治は專制と撰ぶところがない。政治の根本は教育である。徹底せる政治哲學に立脚せずして單に外形の改造に奔走するのは徒勞に屬する。

最善の政策は唯一個である。社會は如何なる時代にあつても優越なる個人の意見によつて進歩向上する。議員が優越なる意見に共鳴し賛成するの自由がなかつたならば議會の言論は全く無意義である。黨議を以て束縛された意見には何等人格的價値を見出すことができない。此意味に於て代議政治の理想は一人一黨主義に到達せねばならぬ。

政治の究極は民衆各個の自覺にある。各人が自我の眞要求に醒めて、理想的世界の建設を標的とし、國家の改善に向つて努力し、人材育成の苗圃として清新なる家



庭を創造するに至つて政治の眞意義は鮮明される。

五〇

## 八 藝術家としての孔子

ある人々は道德を以て因襲に束縛された形式的生活であると解してゐる。社會の習慣に従つて正直勤勉柔順等の徳目を固守し、何の趣味もなく雅致もない人を目して道德家とする。

そうして孔子や孔子の徒を道學先生と呼んで敬遠してゐる。それらの人々は藝術を以て眞に自由の生活であり、最高價値の生活であると考へる。人間生活は利害權勢の争鬪に過ぎない。たゞ音樂を聴いたり自然の美に對へたりする瞬間に於ける恍惚忘我の境のみ、眞に俗塵を脱した自我を把握することができる。藝術こそ至上の生活である。と、この人々は主張する。しかしいふところの恍惚忘我の耽美境は瞬間の經驗であつて單に自我生活の一面を潤すに過ぎない。これによつて自我の全生活の意義及價値を高め自由と感謝とを獲しむることはできない。眞

に全生活をして感謝と自由とに到らしむるものは、自我の根本要求、最高本能の追求としての愛の擴充と敬虔の充實即ち道德そのものであらねばならぬ。

故に權勢利害を根底的に超越した眞の意味に於ける忘我の境は道德的精進の生活によつて開拓せられる。

藝術が美の創造であり、美が利害權勢を離れた純粹無雜な心状態に於ける感覺であるならば利害權勢を脱する純粹境の開拓としての道德は美の核心であらねばならぬ。藝術の根柢は道德であらねばならぬ。

孔子は「詩三百、一言以て之を蓋ふ。曰く思邪なし。」といはれてゐる。これは詩の價値が忠恕一貫の生活によつて權勢利害を脱し全く邪念なき境地に到るにあることを示されたものである。

「子曰く詩に興り禮に立ち樂に成る。」とは詩によつて人間性の美に感奮興起し禮によつて慾望を統制し、一切の視聽言動を美化し然る上に音樂の恍惚忘我の境地を建設すべきをいはれたのである。



「子齊に在て韶を聞き三月肉味を知らず、曰く圖らざりき、樂を爲すのこゝに至らんとは。」師摯の始關雉の亂り洋々乎として耳に盈てるかな。

三月肉味を知らず「洋々乎」として耳に盈てるかな。の如きは孔子の音樂を熱愛せられた態度を表現するものであつて極めて高調な藝術生活と見るべきである。

斯様な高調せる藝術的態度の根柢には必、求道精進の生活がなければならぬ。

求道精進の生活に於て眞の自由があり向上がありそこに藝術的生活が建設される。

「子曰く道に志し徳に據り仁に依り藝に遊ぶ。」はこの意味である。

孔子が天然の美の愛好家であつた事は「仁者は山を樂しみ、知者は水を樂しむ。」といはれた言葉によつて明かであり、又嘗て四人の門人に向つて各其志を述べさせた時、他の三人が爲政上の抱負を以て對へたと異り、曾點が、暮春の頃新製の春衣を纏うて青年五六人、少年六七人を伴ひ沂の溫泉に浴し、舞雲の岡に逍遙し吟詠して歸らん事が吾志であるといつたのを賞賛された事實に徴して知る事ができる。

美を創造するは愛である。愛に充ちた感覺は隨所に美を創り出す。天然を愛するものは天然の美を解し、人間を愛するものは人性の美を感ずる。親は愛によつて其子を美化し、戀は愛によつて其對象を美化する。

藝術は單なる耽美恍惚の境を以て目すべきでない。藝術の眞意義は全生活の美化である。全生活の美化とは一切の苦しみと樂しみと悩みとを包容し醇化するとこの感謝と光明との生活である。

すべての境遇に處して調和あり、統一あり、一切を自我の現顯と觀ずる生活が眞の藝術境である。古人が「天地萬物を以つて一體となす。」といひ「有外の心は以て天心に合するに足らず。」といはれた境涯が全生活の藝術化であると見られる。此意味に於て藝術は道德と合致し、藝術生活は道德の基礎の上に建設されねばならぬことが知られる。

道德は人間眞要求の追求である。人間は皆道德家であらねばならぬ。ある一部の人々を目して道學先生と呼ぶこと、藝術至上を唱へて藝術と道德とを對立せし



むることは謬想である。

## 九 孔子の生活と宗教

「孔子の道を宗教と見るべきであるか。孔子の生活に宗教的信仰が見出され得るか、どうか。

もし佛教・基督教其他の既成宗教以外に宗教はないと認めるならば孔子の道は宗教でない。

未來生活を唯一の標的として現實の生活を單なる準備生活と認めるが宗教であるならば孔子の道は宗教でない。

道德的精進を外にして他力救済を説き天啓を説くが宗教であるならば孔子の教は宗教でない。

しかし實在の根原としての信念を把握し、生活の意義目的を明かにするを宗教と認めるなば、この意味に於て孔子の道は宗教である。」

「現實生活の上に絶対者の支配を確信するが宗教であるならば、この意味に於て孔子の道は宗教と認められる。」

道德的精進即ち神の命の奉仕であると信するが宗教であるならば、この意味に於て孔子の生活は信仰の生活であると認めることができる。」

孔子の道は佛教や基督教の如く信仰の本質を、ある限られた特定の人々の経験と認めず常識の根柢が信仰その者である<sup>もの</sup>と見るのである。善には善報あり悪には悪報がある。天は善に福し不善に禍する。これは常識の根柢をなすところの信念であり自我の奥底に囁く神の聲である。

この神の聲に従て邁進するものは明かに神を信じ、怠て躊躇し、又は神の聲を聞き流しにするものは漠然と神を信ずる。つまり信仰は生命そのもの、核心であるが故に人間である以上絶対に無信仰者である筈はない。たゞ其信仰に厚薄深淺の相違あるに過ぎぬのである。

孔子が宋に在て暴人桓魋のために害せられんとしたとき



「天徳を予にせず桓魋それ予を如何。」といはれた。これは孔子が人格としての神、主宰としての神を認め、天の使命に立てる道德生活は天の祐護にあづかるが故に斷じて暴客の爲に害せられることのないといふ信念の發露と見るべきである。

「子曰く予を知るものないかな。子貢曰く何爲れぞ、それ、予を知るものなからんや。子曰く天を怨みず人を尤めず下學して上達す、予を知るものはそれ天か。」といはれてゐる下學とは日常生活の醇化であり、上達とは信仰の高處に至る意味であつて、信仰に一步一步の向上あり進歩あるを認め、異常奇怪の行を以て自己廣告をなすべきでないことを警めたものである。「子、怪力亂神を語らず。」とある怪力は奇蹟であり、力とは暴力であり、亂とは叛逆であり、神とは神秘である。

奇蹟を喜び神秘を尊ぶは迷信であり利己的である。宇宙の萬象はすべて秩序整然たる理法であり運動であるけれども、之を他の一面から見れば、悉く奇蹟であり神秘である。特に一二の現象を指して、奇蹟となし神秘となすは不合理といはねばならぬ。

一季路鬼神に事へんことを問ふ。子曰く未だ人に事ふる能はず、焉ぞよく鬼に事へん。敢て死を問ふ。曰く未だ生を知らず、焉ぞ死を知らん。「鬼神に事へるとは、死者の靈魂を祭つて福を求めることである。人に事へるとは、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友の倫理を明にすることである。人に事へると鬼神に事へると、其の道は一である。人倫を明かにすれば自ら鬼神に事へるの方を知るべきである。」

「死とは何であるか」といふ問題は之を客觀的に考へたところで分るものでない。吾々の理性は經驗以外のことを認識する能力を持たない。死は全く經驗を超越した事象である。生は現實の經驗である、生は死と相對して評價せらるべきでない。死は生の終りである。生の一現象である。生は死といふ現象を包容する實在である。故に生の意義及價值を明かにすれば死の何であるかを知ることができる。

死は最大の悲哀であり苦惱であり恐怖である。この悲哀と苦惱と恐怖とは自我滅亡の豫感から生ずる。故に自我の永遠性を信すれば、死の苦惱と恐怖とを超越し得るに相違ない。晝間、適度の勞働を取る健康體のものが夜間安眠を得る如く充實



した生を送るものは死に處して平安を得べきである。充實した生活とは愛を擴充して一切を包容する生活である。一切を包容し一切の中に自我を發見し得るものは、死によつて自我の滅亡を豫感することがない。従て死の悲哀と苦惱と恐怖とを脱して、死によつて、より多く生の價值を高める事ができる。これが死の超越である。孔子の病が重態であつたとき、子路が禱らんと請うた。孔子が祈禱の詞を問うたので子路は「上下の神祇に祈る。」と對へた。すると孔子は「丘の禱ること久し。」といはれて子路の禱りを許さなかつた。

道德精進の生活はそれ自らが祈りである。充實せる道德生活には特殊の儀式を用ひて祈禱し、これによつて功利的結果を求むる必要がないと孔子は認められたのである。

それでは孔子は全く祈禱や祭祀を棄てたのであるか。否、祭祀の禮は孔子の最も重んぜられたところであつて「祭ること在于すが如く神を祭ること神の在于すが如し。」とある如く祖先を祭ること祖先の在于すが如く、神靈を祭る事神靈の在于すが如

く誠敬を盡された。祖先を祭つて誠敬を致すことは、人間の至情であつて、功利的手段でない。生活に於ける敬虔の態度を、見えざる過去にまで延長し充實せんとする自我真切の要求である。

「子の慎しむところは齊戰疾」とある「齊」は祭りに當つて心身を潔淨ならしむる行事であつて孔子は殊に之を慎しまれたのである。

## 一〇 孔子と教育

孔子は豊富なる天分の所有者であり、多能博學の聖者であつた。嘗て達巷黨といふ地方の人が孔子を評して「大なるかな孔子、博く學んで名を成すところなし。」といつた。これは孔子が博學多能であつて一藝を以て名を成すに至らぬことを惜んだのである。孔子は之を聞いて「吾何を執らん、御を執らんか射を執らんか。吾は御を執らん。」といはれた。則ち一藝を以て名を成すならば寧ろ人の最も卑しとする御者の術を執らう。しかし一藝を以て名を成すことや博學多能は君子の本領で



ないといはれたのである。

又大宰といふものが子貢に「夫子は聖者か、何ぞそれ多能なる。」と問うたとき子貢は「固よりなり天之を縦して幾と聖又多能なり。」と答へた。孔子は之を聞いて「大宰我を知るか。吾少にして賤し、致に鄙事に多能なり、君子多ならんや多ならんか。」といはれた。これも多能の貴ぶに足らぬことを示されたものである。兎に角孔子は多能であつて詩書禮樂射御のすべてに通ぜられた。殊に音樂に於ては齊に在て詔を聞き三月肉の味を知らずといはれた程の好樂家であり、人と歌うて善ければ必之を反せしめて後之を和せられた程である。子曰く吾衛より魯に歸り而る後に樂正し、雅頌各其所を得たり」といふ如き藝術家であつたが孔子は藝術を以て最上の價値と認めない。「道に志し、徳に據り、仁に依り、藝に遊ぶ」といはれ道に志すを以て生活の核心とされた。

道は即ち仁であり。仁は治國平天下の理想であり全人類愛の理想である。孔子はこの理想を實現せんが爲に、進んで政治の局に當るを求められた。而して周公の

治を想望し周禮を研究し周道の復興を以て任ぜられた。晩年に至つて「吾衰へたるや久し吾復夢に周公を見ず」と嘆ぜられた程、熱烈に周公の治を思慕せられた。「もし吾を用ふるものあらば期月のみにして可ならん、三年にして成すことあらん。」とは孔子が施政上の自信であり「吾斯人の徒と與にするにあらずして誰と與にせん。」といはれて民衆の中に進み入られた。

孔子は斯様な態度を以て、當時七十二の諸侯に遊事されたけれども、其思想を行ふことができない。遂に「道行はれず筏に乗て海に浮ばん。」の嘆聲を發せらるゝに至つた。子、九夷に居らんと欲す。或人曰く陋しいこと之を如何。子曰く君子之に居らば何の陋かこれあらん。」とは孔子が全世界を見ること一家の如き博大な心もちを表すものであり「嗚呼斗筭の人何ぞ算ふるに足らん。」とは名利權勢の爲の職業的政治家を斥彈された言葉である。孔子は實に偉大なる政治家であつた。しかしある意味に於て孔子の政治生活は失敗であつた。

孔子が眞に其偉大性を發揮し眞に成功を贏ち得た事業は教育である。教育は人



生最大の事業であり人間の靈性と靈性とが密に相觸接する働きとして最高の政治であり最高の藝術である。

孔子の教育の趣旨目的は君子の養成である。君子とは仁の理想を追求する人である。即ち愛敬の徹底と善の充實とに唯一の價値を認める生活である。

「子曰く君子仁を去て焉ぞ名を成さん。君子は食を終るの間も仁に違ふことなく造次にも必此に於てし顛沛にも必此に於てす。」

君子は社會國家に對して献身的態度で働く人である。

「子曰く君子は生を求めて以て仁を害することなく身を殺して以て仁を成すことあり。」

君子は俗生活に没頭せず亦全く社會人事を疎外した獨善主義者でない。たゞ正義に従て生活する。「子曰く君子の天下に於けるや適もなく莫もなく義にこれ與に比ふ。」

君子は言行を慎しみ衣食の爲に心を煩さない。「子曰く君子は食飽くを求むることなく居安きを求むることなく、事に敏にして言を慎しみ、有道に就て正すを學を好むといふべきのみ。」

「子曰く君子は言に訥にして行に敏ならんことを欲す。」

「子曰く君子は言て其行に過ぎんことを恥づ。」

孔子の教育は自由主義である。何の強制もなく束縛もなく孔子を中心とした若い思想家の集團であつた。故に教育それ自らが唯一の楽しみであり學習それ自らが悦びの生活である。方便としての職業でなく成功のための手段でない。

「子曰く學んで時に之を習ふ亦悦しからずや、朋有り遠方より來る亦樂しからずや。」とはこの消息を語るものである。

故に師弟の情誼は父子の親の如く、全生涯を通じての心交であつた。

顏淵は孔子門下の天才であつて孔子が最も望みを囑せられたのであるが、三十歳で夭折した。孔子は之を哀しんで「噫、天子を喪せり、天子をほろぼせり。」と痛悼され「哭して慟す」號泣して態度を取亂すに至つた。從者が之を見て「子慟



せり」といふと孔子は「慟することありしか、彼の人のために慟するにあらずして誰が爲にせん。」といはれた。

孔子が匡に於て迫害を被つて通れたとき顔淵が後れて駆けつけた。孔子は顔淵を見て「我汝を以て死せりと爲す。」といはれた。すると顔淵は「子在す回何ぞ敢て死せん。」と答へた。

顔淵の死んだとき顔淵の父顔路は孔子の車を賣つて槨を作らんと孔子に請うた。弟子伯牛が悪疾を患つた場合に孔子は之を見舞うて窓から伯牛の手を握り、之を喪はん、命なるかな斯人にして斯疾あること、斯人にして斯疾あること。」と嘆息された。

斯様に孔子が門人を愛することは父子の親にも過ぎたので孔子が歿した時、子貢は塚上に廬すること六年であつたといふことである。

孔子の教育は個性本位である。各自の天分に應じて其個性長所を發揮せしむる方針であつた。故に弟子の性格により境遇によつて皆其教訓を異にせられた。

顔淵が仁を問へば「己に克て禮に復るを仁となす、よく一日己に克て禮に復れば天下仁に歸す。」と答へ、仲弓が仁を問へば「門を出て、は大賓を見るが如く民を使ふは大祭に承るが如く己れの欲せざるところ人に施すこと勿れ。」と答へ、司馬牛の問に答へては「仁者は其言を詗くす。」といはれた如きはこれである。

子路が「聞くまゝに之を行はんか。」と問うた時、孔子は「父兄在すことありこれを如何ぞ、それ聞くまゝに之を行はん」と誨へ再求が「聞くまゝに之を行はんか。」と問うた時孔子は「聞くまゝに之を行へ」と誨へられた。公西華が二人の間が同じであつて答の異なるを怪しんで其故をたづねると孔子は「由や人を兼ね、故に之を退けたり、求や退く故に之を進めたり。即ち子路は勇に富み進取に過ぐるから事に當つて慎重の態度を取らしめ再求は柔弱であつて保守に傾くから果敢決斷を勧めたのであると答へられた。

孔子の教育は自學自修を重んずる。

「子曰く憤せざれば發せず、悱せざれば啓せず、一隅を擧げて三隅を以て反せざ



れば則ち復せず。」とある如く自憤自覺に本づいて一隅を擧げ他の三隅を以て之を立證するでなければ次の問題に移らないといふ方針である。

純真なる求道的生活にあつては、あらゆる環境は悉く自我向上の素材となり養料となる。緊張せる主觀を以て對すれば一木一草皆吾師である。「子曰く三人行へば必吾師あり其善きものは之に従ひ其善からざるものは之を改む。」とはこの態度をいはれたのである。

衛の公孫朝といふものが子貢に向つて孔子は何處で學ばれたかと問うた。子貢は對ていふ。「文武の道未だ地に墜ちずして人にあり賢者は其大なるものを識り不賢者は其小なるものを識る、文武の道あらざるることなし。夫子焉にか學ばざらん、又何の常の師かこれあらん。」文王武王の自ら修め人を治むるの道は人類の存する限り滅ぶることはない。賢者は道の根本を識り不賢者は其枝葉末節を識る。人倫道德は如何なる時代と雖も絶滅せぬ。孔子の生活は時として處として學に非ることなく一二の人を師とする如き態度でないと説明したのである。

孔子の教育は偏智主義を排斥する。

孔子が子貢に向ひ「賜や汝、吾を以て多く學んで之を識るものとなすか。」と問うた。子貢が「然り非るか。」と答へた時孔子は「非るなり、吾一以て之を貫く。」といはれた。雜學多識は孔子の取らざるところである。忠恕を以て一貫する生活によつて自ら智見の深博となることが理想的學習である。

「子四を以て教ゆ。文行忠信。」とあつて文は詩書の文であり詩書を學ぶは之を實行せんが爲であり、その實行の主義は忠信に歸趨する。

魯の哀公が「弟子孰か學を好むと爲す。」と問うた。孔子は對ていふ。「顔回といふものあり學を好み怒りを遷さず過を貳びせず、不幸短命にして死す、未だ學を好むものを見ざるなり。」

孔子の稱して學を好むとなすところは才辨知識の謂でない。子路の勇、子貢の辨、冉の求藝の如き孔子の稱するところとならない。顔淵は終日默然として無能の如くである。しかも孔子は顔淵を以て獨り學を好むと稱せられた。「子曰く吾、



回といふこと終日違はず愚なるが如し。退て其私を省れば亦以て發するに足る、回や愚ならず。」

人生の最高價値は純真な心もちである。他の爲に自己を忘れ得る態度である。この心もちと態度とが充實されば才智も勇も辯舌も之を用ふるの必要がなくなる。そして眞に悅樂と感謝とに充たされた生活が現實するに相違ない。此理想に基づいた孔子の教育は極力、智識技能を以て競争する學習を斥ける。

「曾子曰く能を以て不能に問ひ、多きを以て寡きに問ひ、有れども無きが如く實つれども虚しきが如く犯せども校らず、昔吾友嘗て、こゝに従事す。」謙虛好問自ら責めて他を咎めざるは孔門の學風である。

### 一 人生は苦であるか、樂であるか。

A、いつまで生きてたつて結局同じではないか。生活は苦痛の連續に過ぎない。一つの苦しみが去れば又一つの苦しみがやつて来る。苦しみと苦しみとの間のホツとする瞬間に楽しみが見出されるのみだ。此世は苦しみだ。娑婆は苦界である。

苦痛と苦痛との連續を傳つていつて其終りが死の淵だ。悲觀せざるを得ない。  
B、苦あれば樂あり、樂あれば苦あり、苦は樂の種である。苦痛と快樂とは大體に於て其量を等しくする。しかし吾々は昨日の苦しみを忘れて今日の楽しみを思ひ今日の苦痛を耐へて明日の快樂に望みをかける。生きてをれば楽しい時が来る。二度と生れて來られる此世でない。死んではだめだ。死にたくない。

C、ホレーシヨの哲學竟に何等のオリーソリチーを價するものぞ。萬有の真相一言にして盡す。曰く不可解。吾此憾みを抱いて煩悶遂に死を決するに至る。既に巖頭に立つに及んで心中何等の不安あるなし。始めて知る、大なる悲觀は大なる樂



觀に一致するを。(藤村操・巖頭の感)

D、樂に馴れれば樂を忘れ苦に馴れば苦を忘れる。苦難に耐へ苦痛を忍べ。苦し  
い境地に身を投ぜよ。そこに眞の歡樂がある。一切の苦痛を克服した生活、それ  
が理想の人間生活である。

E、苦痛といひ快樂といつても、そこに感覺的と精神的との二種類がある事を知  
らねばならぬ。感覺的の快樂は一定の度を過すと苦痛に變つて來る。であるから  
一般の攝生を守り職業に勤勉であれば、まづ以てあまり苦痛を感ぜずに生活する  
ことができる。健康體であつて大した病氣にかゝらぬものは此意味で感覺的快樂  
を享有する人である。精神的快樂は善を實行すること人を愛することによつて獲  
られる。良心に疚しいところがなく道德上法律上の制裁を受けることがなければ  
精神的苦痛を免れるわけである。

F、病氣の經驗がなければ眞に健康の歡びを知ることにはできない。死がなかつた  
ならば生命の眞に愛すべきこと價値あることを解することはできぬであらう。苦

痛は生活を美化する。苦難の中にのみ人間の悲壯美は輝く。苦難に耐へた想ひ出  
ばかりなつかしく楽しいものはない。

G、理屈は一切やめた。僕は快樂を趁うて生きる。瞬間享樂だ。刹那主義だ。し  
かし不思議だ。僕自身の中なるあるものは明かに僕の享樂主義を否定する。そう  
して享樂の絶頂に於て禁欲的隱遁的の氣分の漲るを自覺する。人生は矛盾だ矛盾  
だ。

H、古來の人生觀は厭世觀と樂天觀との二つに分れてゐるが偉大なる思想家哲人  
聖者の人生觀はいづれも究極に於て樂天觀であつた。シヨベンハウエルのやうな  
厭世者でも矢張り解脱の道として藝術と涅槃とを説かざるを得なかつた。佛教で  
も基督教でも一面に於て人生を罪惡と觀、苦痛と觀て悲觀するけれども悟りを説  
き救濟を説く點に至れば、いづれも樂天觀に歸趨するのである。苦痛を自覺して超  
越するところに人生の眞意味は發見される。安眠せる豚たらんよりは煩悶せるソ  
クラテスタレである。



I、孔子は「學んで時に之を習ふ亦説しからずや、朋あり遠方より來る亦樂しからずや」といはれてゐる。學んで習ふとは自覺して努力することである。人間は魚でない。水に陥れば溺れてしまふ。しかし游泳術を練習すれば大海を自由に遊ぶことができる。人間は翼を持たない。けれども飛行機を創つて空中を飛翔してゐる。斯様に、あらゆる知識と技能と藝術とは無限に發達し向上する可能性を有する。品性と人格とも亦さうである。無限に高められ強くせられ醇化せられる。この醇化向上の過程としての努力そのものが人生の意味であり價値であり、そこに生活の眞の悦びが發見される。自分の人格が高められ醇化せられることは人と自分とが親和し融合する意味であつて樂しみこれより大なるはない。朋あり遠方より來る亦樂しからずや」とは此意味であると思はれる。

又孔子は「疏食を飯ひ水を飲み脰を曲げて之を枕とす樂亦其中にあり」「賢なるかな回や一簞の食一瓢の飲陋巷にあり人は其憂に堪へず回は其樂しみを改めず、賢なるかな回や。」といはれ物質的缺乏と感覺的苦痛によつて傷つけられない生

命そのもの、樂しみを把握してをられた。この樂しみとは即ち自我の向上、自我の創造、生活の藝術化としての努力それ自身の價値認識である。憤を發して食を忘れ樂しんで以て憂を忘れ老の將に至らんとするを知らず。」といはれたのを見れば孔子が老境に及んで愈益々向上的努力の充實し緊張していつたことが想はれる。

肉體の旺盛な壯年時代にあつては誰でも相應に勇氣もあり向上の努力もするのであるが、肉體の老衰に向ふと同時に氣力が乏しくなり向上の努力がなくなつて、灰色の生活倦怠した生活に墮落し易いものである。孔子は茲に至つて愈々努力と緊張とを加へ生命の價値觀を高め生活の樂しみを大にされたのである。子の燕居申々如たり天々如たり。」とあるを見れば孔子が如何に、この一日の生活を感謝を以て悅樂を以て暮されたか「申々如」たるそのノビくとした態度「天々如」たるその歡びに輝いた顔色の形容によつて知ることができる。



## 二 孝行は人間の至上愛である。

「有子曰く其人と爲りや孝弟にして上を犯すことを好むものは鮮し。上を犯すことを好まずして亂を作すを好むものは未だこれあらざるなり。君子は本を務む本立ちて道生ず、孝弟はそれ仁の本たるか。」

甲。なぜ親に孝行せねばならんてすか。

乙。……………

甲。親は自己の本能として子を生み、本能として子を愛し子を育てたに過ぎない。これに對し子が特別に孝行せねばならんといふ理由がどこにあるてせうか。それは古い時代の因襲に過ぎないやうに思はれる。

乙。君は「なぜ孝行せねばならんか」と問はれる。私は「孝行とは何であるか。」を説明して君の批判を請ひたいと思ふ。一たい私どもが發明とか創造とかいふことは無から有を作ること或は全く新しいものを製作することてなく有るものを發

見し古いものを作りなほす意味であらねばならぬ。此意味に於て全く新しい眞理はなく全く新しい道徳はない。孝行とは「孝は人間の至上愛である。」といふ事實に目覺めることである。私どもは太陽の下にあつて太陽の恵みを感じぬ如く父母の愛に浴して父母の愛を自覺しない。そして親に背いて戀に走つたり虚榮に走つたりする。しかし色々の生活を経歴して、さて靜かに考へて見れば「孝行のしたい時分に親はなし。矢張り親の愛が最大の愛であることがわかる。子の名譽を眞に自己の名譽と感ずるものは親の外にはない。子の幸福を自己の幸福と感ずるものは親の外にはない。親が子を愛する愛は絶對である。けれども子が親の愛に背いて親と思想が合はぬとか感情が合はぬとかいつて居たならば、親からいくら子を愛しても、その愛は徹底せぬわけになる。それは自分の親と他人の親とを比較して見たならば、或は智識に於て人物に於て自分の親が劣つてゐる場合もあらう。しかし自分を愛してくれるその絶對性に至つては親は子にとつて、たしかに神である。子も亦幼少の時代にあつては親を絶對的に信賴し愛敬したものである。この



知識と經驗との以前に遡つた最も純なる愛敬の自覺に立脚して、その愛敬を充實し徹底していく體驗そのものが孝行である。

つまり孝行は智識經驗以前の純なる愛敬に立つて權勢と利害とを超越し義務献身の態度を以て父母に仕へる體驗である。愛は體驗である。單なる理論でわかるものでない。孝行の體驗は應用自在である。孝の體驗を以て戀をすれば神聖な戀愛が實現され、孝の體驗を以て社會に立てば眞の社會奉仕ができる。孝の體驗を以て國家に對すれば眞の愛國者であり全人類に對すれば神の愛である。

甲。厨川白村は戀愛至上主義を唱へるが僕等には、かなり共鳴されるやうに思ふ。孔子は戀愛に就て何も訓へて居らぬのはなぜですか。

乙。結婚前の哲學は戀愛である。戀愛は青年の血を湧かしむる愛に相違ない。しかし戀愛は其根柢が性慾であつて感覺的享樂に耽溺する傾向に陥り易い。又戀愛は排他的であり一人の愛を獨占するため他の一切を排斥する態度を免れない。そして戀愛は忽ち嫉妬や怨恨の情緒を發する。斯うした様々な矛盾性を帯びた戀

愛はどうしても之を至上愛と認めることはできない。戀愛の内容をどのやうに美しく説示しても戀愛至上といふ名目が既に／＼眞實性を缺いたものである。戀愛教育とか性教育とか唱へるけれども戀愛や性慾は之を唯一の問題として討究することはどうかと思ふ。要するに品性高潔な人々の間に成立つた戀愛は神聖であり清き愛を保ち得るけれども品性の陋劣なものに行はれる戀愛は醜態に終るに定まつてゐる。であるから唯一の問題は品性であり人格である。孔子が戀愛に就て特別に訓へられなかつたのはこの故であつて論語の中で「吾未だ徳を好むことを好むが如きものを見ざるなり」と二回繰返して嘆せられてゐる。これは戀愛に引きつけられるやうな強烈な態度を以て人格的愛の充實に努力すべきを諭されたものである。又「其若き時は之を戒むる色にあり」と曰はれて青年者にあつては寧ろ戀愛は出来る限り之を避くべきことを警告されてゐる。これは孔子のみでなく古來の聖人先覺者は一人として色慾の慎しむべきを説かぬはない。男性としての理想は自己の個性天分を發揮して社會と自我との契合點を確立することであ



る。女性は一般的に見れば唯一の男性を發見して之に純愛を捧げることが最高の理想であるやうに思はれる。

### 三 思想の醇化と言語文章及表情の純化

輪廓はいかめしく外貌は美しいけれど其内容は全く空疎で貧弱だ。飴を引きのばしたやうにダラ／＼とクド／＼しく並べ立てるが少しも中心に觸れない。それが原稿料のために書く現代の文章だ。講演料のためにしゃべる現代の講話だ。一頁何圓、一時間何圓、思想の惡化とはこれである。教育の行詰りとはこれである。

大思想家の思想は單純だ。えらい人の談話は平凡だ。彼は自己の經驗を語り信念を語る。借り着や借り物でコケ威しをしない。

形式と輪廓のみに腐心するところに何の眞實性があらう。何の權威があらう。

「子曰く巧言令色鮮し仁。」

「子曰く剛毅朴訥仁に近し。」

「子曰く辭は達するのみ。」

「子曰く君子は言に訥にして行に敏ならんことを欲す。」

醇化とは簡單明瞭にして中心生命を表現することである。人格の顯現である。純化とは内容と形式との均齊である。内容を離れて形式はなく形式を離れて内容は無い。内容が充實して形式の一步後れたるはよし。形式が過ぎて内容の空疎なるは價值なし。

### 四 人を容るゝこと。人を思ひやること。

人の爲に働らくこと。

人を容るゝこと。人を思ひやること。人の爲に働らくこと。これを外にして愛は無い。愛は體驗であつて理屈でない。

愛は一步步の向上である。一日一日の充實である。努力献身犠牲である。涙

四 人を容るゝこと。人を思ひやること。人の爲に働らくこと。



と血との奮闘である。

あるものはいふ。愛は自他一體感であると。あるものはいふ。愛は美に對する好着であると。これらは愛の輪廓的説明に過ぎない。

子は母の分身であることに於て母の子に對する愛はたしかに自他一體觀に根ざしてゐる。しかし母の愛が必しも人間愛の最高處にまで向上せられない。

戀愛の美も自然愛の美も亦愛の内容を明示するものでない。愛の内容は人を容るゝこと、人を思ひやること、人の爲に働らくことに盡される。

人を容るゝことは人の長所を認め人の美を知り人の善を識り人の人格に服することである。人の善を識るには自己が善に對する明智と體驗とを備へねばならぬ。人の人格に服するものは求道精進に燃え至聖に憧るゝものであらねばならぬ。

人を思ひやることは自己の心情を省みて對者の心情を付度することである。自他一體感を無限に充實する働である。

人の爲に働らくことは他に先つて勞し他に後れて楽しむことであり自己に先つ

て他を眞の幸福に導かんとする努力であり、自己に先つて人を自覺せしめんとする願行である。

人を容るゝこと、人を思ひやること、人の爲に働らくことは無限の努力であり無限の向上である。

孔子は「忠恕」の二字を以てこれらの意味と内容とを表現された。

「子曰く參よ。吾道一以て之を貫く。曾子曰く唯。子出づ。門人問て曰く何の謂ぞや。曾子曰く夫子の道は忠恕のみ。」

## 五 父の墓前へ

お父様!! 今私は歸りました。私が家に歸るとき、いつもお父様は停車場に迎へて下さいました。そうしてニコニコしたお顔をして私の荷物を擔いで下さいました。私の持て来る少しの土産をどんなに喜んで下さったことか。お父様が「ありがたう御馳走様」といつて酒をお飲みになるとき私の心はほんとうによるこび



に満たされました。

お父様。私はこんど暑中休みで歸る前に鬼子母神の森を通りました。すると森の木蔭に蓆を敷いて赤んぼを遊ばせてゐるお爺さんが目にとまりました。私はつくづくとお爺さんの後姿をながめました。私の目からは涙がとめどもなく流れました。あゝもう家へ歸つてもお父様の姿を見ることはできないのだ。さう思ふと私の胸はせき上げて來て一丁程歩くうち涙を禁めることができまへんてした。

私には子がありません。親心のどんなものかを知ることにはできません。けれども、お父様。心から私のよろこびを喜んで下さる人。心から私の幸福を願つて下さる人。心から私の名譽を誇りとして下さる人は此世界にたゞ一人あなただけです。お父様あなた一人です。

お父様はずるぶん頑丈なお身體でありました。若い時相様をとつて村の若者中第一であつたと話して下さいました。生命保険の身體検査で第一等の強健である

と醫師がいつたのを私は思ひ出します。お父様のお身體は普通であればどうしても八十以上まで生きられる筈でありました。お年が老るに従つてだんく酒量が増したので少しは不安を感ぜぬでもありませんでしたが、まだ六十八歳、どんなことがあつても五年や六年は大丈夫とばかり思つてゐました。

今年の正月私は複雑した心の状態で、つい家に歸ることを思ひとどまりました。お父様はそれを非常に淋しがつて下さいました。許して下さい。申しわけございません。お父様の急病といふ電報を受取る一二日前私は學校の歸途お父様のことが心に浮んで直にも家に歸つてお目にかゝりたいやうな氣がいたしました。私が電報を見て夜中に歸宅したときお父様はもう殆ど感情が顔に現れない程の病狀に陥つてをられました。私はその刹那何となくもうお父様はだめだといふ恐れを懷きました。それでも七日や八日で亡くなられるとは思はれませんが、私は東京の學校を止めて家に歸つて御看病をする覺悟をしてゐました。

お父様。もう二十年の昔です。私だちのお母様が長い病の後三人の子供を残し



て亡くなられたのは。長男の私はその時十五歳でありました。それから間もなく私は病氣になつた。そしてお父様からあの山の奥の澁温泉につれて行つていただきました。あの時は三月の十日でございました。麓の道は春らしい色を見せておきました。あつたが山へ登るに従つてだん／＼雪が深くなり、とう／＼三尺も四尺も積み固まつた雪道を辿つて温泉に着きました。山奥にたつた一軒の温泉宿。時節が早いので客は一人も無い。見知らぬ爺さんが二人で留守番してゐる。お父様は一晚泊つて山をお下りなされた。一週間計り経つて迎へに来るからと仰つて。私は淋しくなりました。明けても暮れてもたゞ一人。雪に包まれた深山の一軒家。聞えるものは谷川の音ばかり。夜になると怪しい鳥の聲が谷を響かせる。私はたまらなくなりました。泣き出したい程さびしくなりました。そしてお父様の迎へに来て下さるを三年と思つて待ちました。一日に五度も六度も首を延して密林の間の小路を眺めました。七日目の夕方お父様のお顔が密林の間に現れたとき私のうれしさはどんなであつたでせう。地獄で佛といふ言葉がありますが到底それだけでは

想像がつきません。

その年の四月でございました。東京の大學病院へつれて行つていたゞいたのは。中央線が初鹿野まで開通した當時、汽車に乗ると直にあの笹子の長い隧道の中へもぐりこんだ印象が今に残つてゐます。本郷の下宿に居て淺草の觀音へ參詣に行つたことをお父様記憶しておいでですか。

お母様の長患ひに引つゞいて私の病氣。弟等は幼く財産は少ない。私たちの家は益々生活不如意になつていきました。私は身體が少しづつ健康に復するにつれて家の爲に働らかねばならぬと感ずるやうになりました。

私は小學校へ就職しようと思つて決心して検定試験の準備に取りかかりました。その時はほんとうに一生懸命でありました。十二月の末に試験の結果が發表され尋常科准教員合格者の名前の中に自分の姓名を發見したときお父様は心から喜んで下さつた。私は飛び立つばかりでございました。それから間もなく玉川小學校へ奉職して月給の七圓を受取つたとき私の心は天へも昇る程でした。一里餘りの家路



を足が地につかぬ有様で歸りました。そうしてその七圓をお父様の前に出した時、お父様、私はその時の心もちを忘れることはできません。

お父様が心から喜んで下さる其純な喜びは私にとつて無上の力でございます。私は十何年の教員生活を通じて一圓でも多く月給の残りをお父様にあげて喜んでいただきたいとそれを一つの楽しみとして参りました。今年三月俸給を受取つた時私は、ほんとうに張合を抜かしてぼんやりしました。

お父様。私が少しの間學校を止めた後立澤小學校に奉職して月給貰うた日、私は大雨の山路を三里、途中から日が暮れて眞暗な夜を飛ぶやうに家に歸つたことがあります。

私が土曜日毎に歸宅するのをどんなに待つて下さつたか。そして月曜の朝學校に登る私の辨當箱の中へ色々の食物を詰めて下さいました。お父様が四里の山路を歩いて私の寓居へ来て下さつて校長を招んで三人で一夜飲み語つた時の楽しさ愉快さ。それを知るものはたゞお父様を私とのみです。

お父様。私が長地學校を退職して歸るとき私の荷物の形つけに来ていたゞきましました。そして家主の爺さんと一しよに飲みました。大きなバックの中へ炊事道具を入れて脊負つて歸つて下さつたことを思ひ出します。

私が伊那の羽北分教場に居て文部の檢定に合格した時、お父様は三日飲みつめて祝つて下さつた。そうして私が都留中學校へ奉職することになつて分教場を引拂ふときもお父様は荷物をまとめに来て下さいました。

大正九年の夏の富士登山を思ひ出して下さい。親友の桑澤とその父君と、お父様と私四人連れてございました。大月の私の寓居で四疊釣りの蚊張の中へ四人が頭だけ入れて一夜明したのであります。お父様あの時は大さうな元氣でございました。ちやうど私が九月から愛知一中に轉任する都合になつてゐたので登山の歸りに私の荷造りをしていたゞきました。私の名右屋に居る間にお父様と一しよに是非伊勢參宮をする豫定で弟が路金の用意までした時でありました。私が重い感冒に侵され私の妻が入院するやうな騒ぎになつて電報でお父様から来ていたゞ



いたことがございました。幸私も妻も全快したのでお父様は二三日名古屋を見物してお歸りになりました。そんな事で年來の伊勢參宮の御希望をつひ果さず了りました。私がある煩悶を懷いて愛知一中を退職して歸郷した頃から私たちの家に何となく暗雲が襲ひかゝつてゐるやうな心もちに打られました。家に飼つてある鶏の牝が晨を作るのをお父様はひどく氣になさいました。私も「何ッ」とは思ひながらも氣にかけずにはゐられませんでした。私が東京へ就職することに決定した時お父様はいつものやうに喜んで下さいましたが、この年の秋横濱に居る弟の妻が難産で死し残された赤んぼを家に引取つて育てねばならぬことになり、つゞいて昨年の大震災で東京の弟が被害の爲生活に窮するといふ始末。かやうな廻り合せの悪い中にお父様は突然の御病氣で永久に私たちをお見捨になりました。

お父様。今四五年も経つたならば必幸福な境遇を喜んでいたゞくことができたであらうと思ひますが致し方ございません。大正十三年二月十八日。お父様の御病氣が危篤とも思はずに二人の弟は一先づ東京に歸り私だけが残りました。醫師は

俄に危篤を宣告しました。夜に入つてお父様の容體は益々悪く見えました。苦しさに口と手とを動かされるのみで、もう聲さへ出ないやうになりました。夜半過ぎる頃「純一」と明かに私の名をお呼びになりました。つゞいて「巖」とこれも明らかに弟の名を呼ばれました。看護してゐるもの一同涙を拭きました。それから一時間程してお父様は呼吸を引取られたのです。

お父様!! 昨年の暑中には二人で土藏の屋根へコールタを塗つたり軒端の松の木を虫を除つたりしました。私が東京へ歸るとき汽車の窓から帽子を振つたときお父様は庭に出て兩手をあげて見送つて下さいました。あれが意識しての此世のお姿の見納めであらうとは私は少しも思ひませんでした。お父様私は今土藏の二階でこゝまで書いて來て聲立て、泣いてゐます。

お父様。あなたの生きて居られるうち私は離れてゐてお父様の事を思はぬ日もございました。お父様の亡くなつてから私は一日としてお父様のことを思ひ出さぬ日はありません。



お父様。あなたは壽命を分けて私に下さつたのです。私はそれを信じます。そうして勇ましくこの生涯を働らいてお側に参ります。(大正十三年八月十日)

悲しみの涙と、まらさず亡き父の

みたまに告ぐるふみ認ためて

## 六 用を節して人を愛す

「儉にして施を好むは真に大徳の人なり。」と具原益軒は言つた。人間は自己を以て他を推すものである。自分が質素儉約のものは他人に要求するに亦質素儉約を以てする。故に儉約のものは多くは人に施すを好まない。豪奢のものは人に施すを好むけれども亦人の施を受けて何とも思はぬ。結局物質に窮乏して施すことができなくなる。費用を節約して人を愛し自ら生活すること薄くして人に恵むこと厚きは真に人格者である。「用を節して人を愛す。」の一語極めて平凡であつて意味深長である。此一語の實踐によつて一切の政治經濟社會問題は解決される。此一

語の徹底によつて自我は高められ神の國は建設される。

## 七 對抗の心もちを脱せよ

人間の向上と福祉との第一歩は各自が對抗の心もちを脱せんとする内的努力から發足せねばならぬ。

對抗の心もちとは權勢と利害とを以て相競ふ心の状態である。現代の生活はすべての方面にわたつて、あまりに對抗の氣分に充たされてゐる。子は親と對抗し生徒は教師と對抗し婦人は男子と對抗し労働者は資本家と對抗し民衆は政府と對抗する。

對抗は争闘である。争闘は愛の消磨である。

惡を以て惡を救ふことをはできない。對抗によつて人類愛を求めるとは薪を抱いて火を救ふの類である。

「子禽、子貢に問て曰く夫子の是邦に至るや必其政を聞く。之を求むるか抑之を



與ふるか。子貢曰く夫子は温良恭儉讓以て之を得たり。夫子の之を求むるや、それこれ人の之を求むるに異なるか。」

孔子が政治に於ける態度はいさゝかの權勢と争闘との跡をとらめない。

ワシントン<sup>ト</sup>は全國民の選舉によつて大統領となつた。彼は就職の挨拶に方つて顔を赤らめた位溫柔な性格であつた。

## 八 貧富の超越

富によつて幸福を得るものは賢者のみである。古の聖賢の物質上の生活は現代の貧民よりも低級であつた。彼等は世の貧しきものに同情した。貧しきがために傷つけられる生命を憐んだ。そして獨り自ら物質を所有するに忍びななだ。

彼等は世の富める者を觀た。富めるものゝ内生命を噛みつゝある悲劇に注目した。物質中毒に惱める富豪を憫んだ。

それ故に、富の前に頭を下げることに物質によつて貧者を恵むことが單に富者を

驕らしめ貧者を卑屈ならしむるの外高き價值なきを知つた。

聖者は貧富の何れをも惡まず亦何れにも味方しない。彼等の求むるところは道である。仁である。愛である。

彼等は徹底せる同情—愛によつて一切の生活を美化するところの藝術境—自由の天地—に逍遙する人間の眞樂をしつかりと把握した。そこにおのづからなる貧富の超越があつた。

「子曰く貧しくして諂ふことなく富で驕ることなきは如何。子曰く可なり。未だ貧しくして樂しみ富で禮を好むものには如かざるなり。」

(禮を好むとは生活を美化する意味である。民衆と樂しみを共にする意味である。)

「子曰く不義にして富み且つ貴きは我に於て浮雲の如し。」

「子曰く富にして求むべくんば執鞭の士と雖も吾亦之を爲ん。もし求むべからずんば吾好むところに従はん(好むところ即ち道)」

「子曰く齊の景公馬千駟(巨萬の富)あり死するの日民徳として稱するなし。伯夷



叔齊首陽の下に飢ゑたり民今に到るまで之を稱す。それこれを謂ふか。」（人間の本性は徳を好み道にあこがれる。）

「子曰く賢なるかな回や一簞の食一瓢の飲（粗食、陋巷（貧民長屋）にあり、人は其憂に耐へず、回は其樂を改めず。賢なるかな回や。」（眞の自由は最低限の生活に於て獲られる。そこに人間の至樂がある。）

### 九 人を理解せよ、人に理解を要求するな

親が理解してくれぬからといつて父母にそむく子がある。夫が理解せぬを怨んで他に愛を求むる妻がある。他人が吾を知らぬと怨むを止めよ。社會が自己を認めぬと罵るを止めよ。

他に理解を求むる前に先づ他を理解せんと努力せよ。

他人の長所を認めよ。他の美點に注目せよ。先づ對者の地位と境遇とに自らを置いて考へるがよい。父母の身になつて考へるがよい。夫の身になり妻の身にな

つて考へるがよい。人々がすべて互に對者の長所を認め美を認め、その思想を理解すべく努力したならば自己が他に知られず社會に認められざるを問題とする必要は無くなる。

人を知るは難しい。人を理解するは難しい。他の善を知るは自己に善があらねばならぬ。他の美を解するは自己に美があらねばならぬ。偉人を知るは偉人である。聖賢を解するは聖賢の徒である。

「子曰く人の己れを知らざるを患へざれ。人を知らざるを患へよ。」

### 一〇 哲人 政治。

プラトンは哲人政治を主唱した。哲人とは人生に對する達觀と熱愛とを有する人格者の謂である。

唯一の賢人が國家統治の地位にあるべきは政治の根本要件である。此意味に於て政治は天子が天下第一の賢者を擧げて之に天位を譲るところの禪讓專制の形式



と民衆が最賢者を選んで統治権を委ねるところの共和代議の形式とに分れる。

支那古代に於ける堯舜禹の禪讓の如きは前者の理想的標本であり亞米利加に於てワシントン、リンコルンの擧げられた如きは後者の理想的標本である。政治が理想的に行はれるならば形式は何でもよろしい。名君の出るは稀であつて凡庸の君主が常であるならば國政は専制よりは代議制を勝れりとせねばならぬ。

いづれにしても政治の要は自治に歸するのであつて理想的政治の實現は民衆各個の政治的覺醒に待つべきは明である。民衆の無自覺なる場合、専制政治は凶雄の政權爭奪となり代議政治は金力萬能の資本家政治となるは自然の經路である。全世界統一は國際道德の發達に待たねばならぬ國際道德の發達は各國家政治の向上に依らねばならぬ。

國家が其歴史を離れて國家の現在なく將來なきは個人が過去經驗を離れ履歷を他にして現在の生活なく將來の理想なきことと同一である。

國民が悉く政治的自覺に達した時、國家は完全なる自治體となり最早や特殊の

政治家と主權者とを要しない。

國民が情實と黄金とによつて左右せらるゝ状態になつては國家が絶對的尊嚴性を有する主權者を有することは國民生活にとつて敬愛と献身との貴き情操の源泉として最大の福祉であらねばならぬ。此意味に於て吾々は我日本の皇室中心政治を讚美するものである。

但し政黨政治は黨利本位となり金力政治となり到底哲人政治の理想を實現するに適當しない。

代議政治は一人一黨に到達せねばならぬ。一人一黨に到達して後に議會の言論に眞の價値と權威とを生ずる。

内閣總理大臣は議員によつて選舉せられ當選したる人物に大命降下あるべきである。首相は院の内外を問はず遍く人材を拔擢して内閣を組織する。斯くして眞の哲人政治が實現せられる。

「子曰く政を爲すに徳を以てす譬へば北辰の其所に居て衆皇の之に共ふが如し。」



## 一一、思邪なし。

「子曰詩三百、一言以て之を蔽ふ、曰く思邪なし。」

孔子の刪定された詩經は三百十一篇の詩から成立してゐる。その詩の全篇を通ずる藝術的價値を一言にして蔽ふところの言葉は「思邪なし」の一語である。人間の本性はそのまゝにして直であり純であり善である。その本性の力がゆがめられた状態が利害心であり權勢欲であつてその反省されたものが邪念である。

人間が機に觸れ縁に因つて純情の流露する場合その純情の表現されたものが詩である。

故に詩はこれによつて本性に自覺め純善に興起し思邪なしの美意識に逍遙するところにその藝術的價値を見出すのである。

邪念なきは邪行なきに基づき邪行なきは忠信篤敬の生活を基調とする。伊藤仁齋が「思邪なしの一言は聖學の始をなし終りをなす所以なり。」といつたのは至言

である。

## 一二、運命と自由

過去に於ける純なる經驗より得たるある強き印象は往々直覺的に未來の出來ごとを豫知せしむる暗示となるものである。この暗示の醇化され徹底された状態が運命觀であり天命を知る境地である。

「子曰く吾十有五にして學に志し三十にして立ち四十にして惑はず五十にして天命を知り六十にして耳順ひ七十にして心の欲するところに從て矩を踰えず。五十にして天命を知るとあるは徹底せる運命觀を樹立された意味である。人間一生の經路は死生窮達貧富得失に至るまで悉く一定の數があり絶對者の支配の下にあつて自己の意志を以て左右することのできぬものである。第一自己の誕生それ自身が父母の意志でなく亦自己の意志でない。全く絶對者の意志であると見るの外はない。一切の境遇皆然りである。しかし絶對者と自己とは全く無關係のものである。



り何等の交渉なきものであるとは思はれない。自己は絶対者の一の顯現であり自己の意志は絶対者の意志の延長であると見ざるを得ない。故に一切の環境と出來事に對してはありがたく感謝を以て之を迎へるべきである。そうして一切の生命を創造する絶対者の意志を信じてすべての生命を尊重し愛育することに向つて全力を傾注すべきである。

一切の外的生活—死生得失—が全く絶対者の支配である。と信じた時即ち運命觀の確立された時、自己の行く道は善を徹底し愛を擴充する以外何の希望もなく期待もない。こゝに至つて自己は解放の生活に入り自由の天地に第一步を踏み出すのである。「七十にして心の欲するところに從て矩を踰えず」とは運命觀の確立によつて自由の天地を開拓せられた徑路を示されたものである。「十五にして學に志す」とは人格價値の認識であり自由なる自我の目醒めである。「三十にして立つ」とは自己の天職を覺り自我と社會との契合點を明かにし經濟生活、社會生活に於て獨立の地歩を建設された意味である。「四十にして惑はず」とは經驗と知識とに

於て時代思潮を達觀し利害の爲邪説の爲に迷はされぬ境地である。

### 一三、愚 人

神を語り生命を説く宗教家。むづかしい論理を構成する哲學者。科學萬能を信ずる人。經濟革命を叫ぶ人。綱紀肅整を唱ふる政治家。教育第一を主張する先生。藝術至上を唱へ美的生活に憧がる、詩人、文學者。

あゝ智者と賢人とに充てる現代。百花爛漫たる現代の生活。その爛漫たる百花の培はるゝ泉。—黄金の泉—。

雨あられ雪や氷と變れども落つれば同じ谷川の水。

宗教家よ。神を語るをやめよ。哲學者よ。カントの如く嚴肅なれ。科學者よ。

ニュートンの如く敬虔なれ。

社會改良家よ。先づ卿等の生活を最低限に置け。

政治家よ。ワシントンとリンコルンとに則れ。



教育家よ。學校萬能の迷想を打破せよ。

一切は究極に於て一である。

黨を立てる勿れ。閥を設ける勿れ。階級を造る勿れ。

わけ登る麓の道は變れども同じ高嶺の月を見るかな。

宇宙は無限。人生も亦無限。無限の愛と敬虔の泉。

この泉を汲むものゝみ眞理を信じ永遠を知る。

彼は黄金の泉に培はるゝ一切の花に對して盲目である。

それ故にすべての智者と賢人とは彼を目して愚人と呼ぶ。

あゝ愚人。愚人。汝の泉は無限である。

黄金の泉は涸れて。汝の生命は永恒である。

「子曰く吾回(顔回)といふこと終日違はず愚なるが如し。退て其の私を省みれば亦以て發するに足る、回や愚ならず。」

#### 一四 人間の機械化

「子曰く君子は器ならず。これは人格は器械でないといふ意味である。人間は器械を使用する地位にあるもので器械に使用されるものでない。科學文明は人間が器械に驅使せられる生活である。人間の機械化である。魂のぬけた意氣のない器械的に働らく動物にまで人間を墮落させるものが物質文明である。商工主義の文明である。都會文明である。人間が金の奴隸となり器械の奴隸となることは不自然な行き方であり堪へがたき苦痛である。

資本主義の社會が共產主義の社會になつたところでたゞ器械の持主の名義が變るだけで人間が器械に驅使されることに變りはない。

どうしてこの不自然な行詰つた墮落の生活から自らを救ひあげて人間性本來の向上を持続すべきか。

器械を發明したのが悪いからといつて今更電燈を松明にかへし汽車を駕籠にも



どすことは不可能である。

要するに人間が各自人格價値に目醒めるより外はない。それは農村文化の建設であり農村青年の覺醒である。

今の時はバーノン山の農民ワシントン南陽の農民諸葛孔明を要する。現代はたゞ幾人のワシントン幾人の孔明が再來することによつてのみ救濟される。

### 一五 思索と經驗と讀書

經驗——思索——讀書。

思索——經驗——讀書。

讀書——思索——經驗。

經驗は貴いけれど思索を伴はぬ單なる經驗は支離滅裂で價値が乏しい。

思索を欠いた讀書は多讀博識であつても、それは纔かに生字引の用をなすに過ぎない。

思索は人格の核心である。しかし讀書と經驗とに乏しき思索は往々にして脱線的となり狂的となる恐れを免れない。

思索を根本として讀書經驗に培はれた人格が全き花實の所有者である。

「子曰く學んで思はざれば則ち罔し。思うて學ばざれば則ち殆し。」

### 一六 先づ對者を尊敬せよ

人に尊敬されるものが偉大であるか。人を尊敬するものが偉大であるか。と問ふものがあらば私は答へる。眞に人を尊敬し得るものが偉大であると。

人を敬せずして人に敬せられんと願ひ人を愛せずして人に愛せられんと願ふはあまりに蟲のよい考である。

先づ對者を尊敬するがよい。先づ對者を愛するがよい。

然らば其愛と敬とは必ず報いられるであらう。

西郷南洲は人に逢して「ゾツコン惚れこんだ」さうである。



こちらから惚れないで先方からのみ惚れられることを望むは利己主義の限りといはねばならぬ。

此意味に於て吾々は尊敬の對象として父兄を有し年長者を有し人格者を有し地位高き人を有し聖賢を有することを喜ばねばならぬ。

「子曰く君に事へて禮を盡せば人は以て諂へりとなす。」  
權勢欲を逞うして自由平等を唱へ漫りに社會的秩序を無視せんとするは禍である。

## 一七、母の靈に

明治三十五年六月三日。お母様が逝かれてからこゝに二十三年。お墓の土も一年一年と低くなつてもう今は全く平らになつてしまひました。

お母様のお身體は全く土に化つてしまつたのだ。しかしお母様。あなたの靈は天にあります。私の頭上にあります。私の行くところについて行かれます。そう

して常に私を守つて下さいます。

お母様は私の幼少の時分、折々斯ういはれました。「私はお前について行く。東京へ行けば東京へ北海道へ行けば北海道へ。」お母様、それは冗談ではございませぬ。ほんとうにお母様のお心です、信念です。

お母様がなくなつて間もなく私は病氣にかゝつてあの松林の中の檢校菴に厄介になりました。あそこはお母様と因縁の深い尼寺です。私はあの寺で非常に深切にしてみらひました。そして私の一生にとつて最も重要な克己と同情との源を植ゑつけて貰ひました。

私は二十歳の時試験のために長野市へ行きました。それはたゞ尋常科准教員の試験に過ぎませんが、その時の私にとつては實に一生懸命の戦でありました。私は長野に着いて直に善光寺に參詣しました。お母様が二十何歳の時悲哀に満ちたお心をいだいて其當時汽車も何もない二十餘里の道を峠を超え野原を横ぎつて、たゞ一人善光寺に旅をなされたといふお話を聞いてゐた私は善光寺の境内に入つた



ときお母様の霊が私を導いて下さる事を感じて心強さを覚えました。それから七年経つて私は立澤小學校に奉職することになりました。私が家を離れて一人で生活したのはこれが始めでありました。私は始めて立澤に登つたとき寂しさと懐しさとに泣きました。それはお母様が私の父の處へ嫁がれる前、この立澤に一冬を送つたといふことを私に語られたのを思ひ出したからです。立澤は八ヶ嶽の麓——麓といふよりも寧ろ中腹に位する一山村です。八ヶ嶽から流れ出す立羽川の谷間にあつて三百戸の農民が豊かな純朴の生活を送つてゐます。學校のすぐ後ろは森林に續いて苔の蒸した岩石がゴロ／＼してゐて深山といふ感じに打たれます。私は夏になれば學校の放課を待て毎日この森林へ行き讀書しました。冬になれば一面眞白な雪に埋れて道も堤も一平になることがあります。

月曜の朝暗いうちに家を出て三里の雪道を上つて行くと太陽の第一光線が八ヶ嶽の頂から眞白の高原を照し出す。遙か東の雲井には富士の高嶺が鮮かに聳え立つ。その光景は崇高とか壯嚴とかいふ言葉を以て表はさるべき美觀でありました。

私は思はずこんな歌を口吟んだことを記憶してゐます。

仰げよや朝日に匂ふ白雪の富士の高嶺ぞ立澤の民。

八ヶ嶽峰の白雪滴りて立羽の川の流ぞ清き。

わが母は三十年のその昔この里に来て冬を送りし。

母が死して十三年の今にしてその子我はもこの里に住む。

私はお母様の住で居られた家の人に招かれて色々な話を聞きました。生徒をつれて八ヶ嶽に登りました。秋には紅葉を折つて教室に満艦飾を施しました。

お母様、立澤の生活は私に最も深い印象を與へてくれました。私はその後長地小學校、伊那富小學校と轉々し中學教員になつてからは山梨縣の都留中學校に一年半、名古屋の第一中學校に一年半を過して今は東京の〇〇學校に奉職してゐます。

お母様、あなたが今生きてゐて下さるならば私はあらゆる力を盡して御恩がへしをいたしたいと思ふのでありますがどうも致し方ございません。



お母様はほんとうに苦しみつゝけて死んでいかれたのです。お母様がなくなられたとき私は十五歳、二人の弟は十三歳と十一歳とでありました。お母様が臨終の際私はお母様の脊の方に入つてゐました。その時にお母様は硬ばつた舌でかすかな聲を洩されました。「子供等はどうか幸福に暮させたい。」

お母様あなたは大望心と情熱との人でありました。渾身の愛を私ども三人の上にそゝいて下さいました。子供を偉いものにしたい。たゞそれだけがお母様の願ひのすべてでありました。お母様の生命が碎けて私たち三人の生命となつたのです。私は地位も富も持ちません。けれどもお母様からいたゞいた大望心と向上の志とは一日も棄てないつもりでございます。

お母様が私を生んだ時うれしさと可愛さで毎夜眠られず私の顔を凝視めたと私に話して下さいました。お母様、すべての母は、皆其子を愛しますが、あなたのやうに熱愛を注がれる母は少ないと思ひます。私はお母様から受けた熱愛をお母様におかへしすることができません。その代りとして私はすべての人の上に

熱愛を注ぐべく奮闘せねばなりません。

私は嘗てお母様の友立の人から話されました。お母様は善い人であつた。涙の人、情の人であつたと。或年の凶作には三里も四里も隔たつた村の人々がわざわざお母様の生家まで米を買ひに來たことがあつた。それはお母様が量りをよくして賣つてやつたからであると聞かされました。

お母様は深い悲哀の道を通つておいでになりました。十五歳の時嫁に行つて十年の長い間純なる愛に抱かれた樂園の生活はある朝夫の急死に逢つた其瞬間から忽ち悲哀の淵と化つて了ひました。お母様は毎夜夫の墓に詣でられた。ある夜いつもの如く香を手向けて歸らうとすると足下に大穴が開いてズドンと其中に陥ちこまれた。それは古い棺桶の蓋が朽ちたのであつた。その夜限り墓詣りが恐くなつて止めにしたとお母様は私に話して下さいました。つひにお母様は傷いた魂をいだいて生家に戻らねばならぬやうになつた。お母様は悲哀のあまりひどく神經を痛めてとう／＼狂氣なされた。そうして檢校菴にお籠りして癒えられたと私は



聞いてゐます。お母様、その時でせう。たゞお一人で二十餘里の山坂を越えて善光寺へ旅をなされたのは。お母様がその時から十年目に獨身の決心を齎して父の處へ再縁なされたのは三十四歳の時でございます。その翌年初子として私が生れた。お母様が全生命をあげて私等を熱愛して下さつたのはほんとうに意味あることです。お母様、私が四五歳の時祖母の家につれられて二三ヶ月を送つたことがありました。私がお母様の後姿を見てうれしさのあまりたゞ聲を立て泣き出してしまつたことがございます。

お母様は毎夜寢床に入つたときいつも私たちに石童丸の話を聞かせて下さいました。石童丸が母に伴られて高野山の麓に着く。それから母を宿に残して一人て山へ登り父の在所を尋ねると一人の坊さんが出て来て尋ねる父はもう死んでしまつたといふ。ほんとうは其坊さんが石童丸の父であるけれど山のおきてとして父子の名のりを許されない。石童丸は泣く／＼山を下つて麓の宿へ歸つて見ると母は

旅の疲れの病氣が重くなつて死んでしまふ。お母様のお話がこゝまで來ると私達はワアツと聲をあげて泣き出す。それで話はおしまひになる。次の晩床に就くと又石童丸の話を強情る。泣くからいやだ。今夜は必つと泣かないから話して。石童丸が山を下つて宿屋へ歸る。又ワアツと泣き出す。

お母様、時間の經つのは早いものです。私は今年三十七歳。弟二人は三十五歳と三十三歳です。

お母様の亡くなられたのは四十九歳の夏でございました。お母様が私を生んで下さつてから十五年の間の生活はほんとうに忍苦の生活であり奮闘の生活であり犠牲の生活でございました。お母様の苦勞に對し私たちは少しの報いるところもなかつたのです。お母様今年二月十一日。私は突然お父様急病の電報に接して直ちに歸宅いたしました。お父様の病氣は腦溢血で私の歸つたときはもう半昏睡状態でございました。巖も敬一も歸つて來ました。姉様や義兄叔父様たち一同で夜晝看護して下さいましたがお父様の御容體は日々悪くなつて十八日の夜半遂に永



きお別れとなつてしまひました。

お母様、今日は八月十五日です。私はお父様のお施餓鬼のために今頼岳寺に來てゐます。今日は巖も敬一も歸つて來る筈であります。敬一は一昨年妻を失ひ巖は昨年震災の打撃で一時困難しましたが皆元氣で働らいて居ます。

お母様、大望心、情熱、それはあなたの唯一の生命であり亦私だちにとつて唯一の生命でございます。私だちは生涯を通してこの生命を養ひ育てることによつてお母様の生命の永恆を信ずることができるのでございます。

### 一八 享樂の絶頂から悲哀の谷底へ

歡樂極つて哀情多し。とある如く快樂がある限界を超えれば必悲哀に變るものである。これは興奮された神経がその反動として沈衰する作用によるものである。悲哀の去つた後に一時平和な氣分爽快な精神状態の經驗されることもこれと同じであつて、かの大なる悲觀は大なる樂觀に一致す。といふ告白も亦肯定せら

れる。

哀樂の絶頂から悲哀の谷底への生活は最も高調せる情趣を味はせ詩的生活を偲ばせる意味に於て若き人々の憧憬の對象となる傾があるが悲哀の谷底に墜落することによつて自我に癒え難き創傷を負はせる場合多きを考慮せねばならぬ。

高調な享樂と高調な悲哀とはそれが自我を成長させる場合にのみ肯定せらるべきである。

「子曰く關雎は楽しんで淫せず哀しんで傷らず。關雎は詩經首編の名であつて高き人格と清き性格とによつて醇化された戀愛を詠つたものである。楽しんで樂しみに溺れず、哀んで哀しみに傷つけられぬ點に於てよく調和された情緒と美化された生活とを表現するのである。

### 一九 形式に捕はれて精神を失つてはならぬ

「子曰く上に居て寛ならず禮をなして敬せず、喪に臨んで哀しまずんば吾何を以



て之を觀んや。」

形式打破を唱へ平等を唱へる寛大の人間も一度ある團體の長となり統率者の地位に身を置くやうになればその地位に捕はれて苛察となり偏急となり團員の短所を指摘するに馴れて部下の長所を發揮せしむることができなくなる。

禮が敬虔の精神を没して單なる虚飾に流れること、喪に居て悲哀の情がなく、ただ外觀の美をことゝするはいづれも形式に捕はれて精神を失つたものである。すべての形式を通してその根本精神を把握することを忘れてはならぬ。

## 二一〇 最高の理想を把持するもの、みが苦樂を超越する現實の眞生活を解し得る

「子曰く不仁者は以て久しく約しきに處るべからず、以て長く樂しきに處るべからず、仁者は仁に安んじ知者は仁を利す。」

人間最高の理想(仁)を持たぬものは久しく苦に耐へ逆境に處して新生命を開拓

することができない。彼は自暴自棄していよ／＼自我を窮地に陥れるのである。又長く順境に處して樂しみを維持することができない。それは快樂に耽溺してやがて悲哀の淵に沈むからである。最高理想に安んずる境地に達したところの仁者は苦樂の境を超越する。まだこゝに到達しないところの知者は仁の理想の追求を唯一の利として苦樂の境遇に處してよく之を開拓し得る。理想は常に遙か彼方にあつて現實と隔たつてをる如く解するは謬りである。理想は現實の核心にあつて現實を創造する生命であらねばならぬ。

## 二一一 朝に道を聞けば夕に死すとも川なり

百年三萬六千日。いくら長生したくても遂には必ず死なねばならない。しかし長生はどこまでも欲する。けれども死はどうしても免れない。故に吾々は死によりて滅びざるあるものを求めて止まない。親は子を熱愛する。それは自分の生命が子によつて不滅なるを意識するからである。故に死によつて滅びざるあるもの



は子に對する愛の中に其端を發見される。この心もちを徹底し擴充してゆけばよいのである。

愛は不滅の眞理である。醇なる愛の生活はその一日に於て永恆の相であり絶對價值である。

「朝に道を聞けば夕に死すとも可なり。道を聞くとは醇なる愛の體驗である。夕に死すとも可なりとは純眞なる求道的態度である。眞の理想主義であり眞の現實主義であり徹底せる刹那主義である。」

## 一二二 求道の基調は最低の衣食に甘んずる

にあり

「子曰く、士道に志して惡衣惡食を恥づるものは未だ與に議するに足らざるなり。」美衣美食を貪るはすべての罪惡の根源である。人間が最低の衣食に眞の美感を發見することができればあらゆる生活問題、社會問題は根本的に解決される。

吾々が少しく眞面目になつて自己の周囲の同胞に眼を注いだならば自分一人豊富な物質を所有し美衣美食を擅にするに忍びざる情が起るは當然である。

又少しく切實に反省したならば、衣食の華美を求めることが、徒らに身心を煩はすのみであつて、何の價值もないことを悟るであらう。古の聖者は今日の貧民よりも猶低級な生活に甘んじた。そうして彼等ほんとうの意味で其生活を享樂した幸福者であつたことを否定することはできない。

故に孔子は「賢なるかな回や、一簞の食一瓢の飲陋巷にあり人は其憂に堪へず回は其樂しみを改めず賢なるかな回や。」といつて顔回が粗食陋屋の生活に居て道を樂しめる態度を賞讃し「禹は吾間然するところなし、飲食を菲うして孝を鬼神に致し衣服を善くして美を黻冕に致し宮室を卑くして力を溝洫に盡す禹は吾間然するところなし。」と禹が王者の境遇にありながら惡衣惡食に甘んじて力を政治産業に盡したことを讚嘆された。



### 一二三 永恒の象徴としての刹那

刹那が積つて永遠となり一日が重なつて百年となる。

完き幸福はこの一日にあり。充實した一日は充實した刹那の持続であり充實した一生は充實した一日の連続である。眞にこの一日を充實し得れば必一生を充實し得る。

生活の價値はこの一日に繋りこの現在の刹那に繋つてゐる。しかし、それは其日暮しの出たらめの生活や氣まぐれの刹那主義とは全く相反した立場にあるを知らねばならぬ。

永恒の象徴としての刹那に唯一の價値を認める生活は一貫した主義によつて全生活を統一するところの向上的努力を以て建設される。此意味に於て曾子が孔子の道を忠恕一貫の生活であると解釋したのは當を得たものである。忠は自我の全部(智識と經驗)を盡して他の爲に謀り且つ働らくことであり恕は自己の情緒を反

省して他の心もちを推察付度することである。忠恕を以て生活を一貫すれば自己と他人との隔壁がなくなり人を容るゝの量と人を知るの明と事に處するの識が具はる。そうして日々の経験を永恒の表現として生活する境地に達する。

「子曰く參よ。吾道一以て之を貫く。曾子曰く唯。子出づ。門人問て曰く何の謂ぞや。曾子曰く夫子の道は忠恕のみ。」

### 一二四 正義は普遍妥當的である

「何人が自分の地位にあつても必斯様に行はねばならぬ。」といふ信念に立つて行ふところの行爲が正義である。この信念を外にして他の要求を以て行爲することは利己主義である。

多くの場合私どもは無意識の間に正義の道を歩んでゐる。それは孟子のいつたやうに「義は人の正路」であるからである。

しかし特殊の場合、ある事件に遭遇した場合、反省と考察とが要求されるとき



私どもは右せんか、左せんかといふ岐路に立たせられる。そしてその時に「これが正義である斯様に行はねばならぬ。」といふ觀念が明かに意識される。

正義は普遍妥當的である。それは人間性が普遍的であること人間の思想や感情が互に共鳴―應感―理解することによつて明かである。又私どもが「何人にも愧ぢざる行爲である。」といふ判断を持つことそれ自らが正義の一般性と共通性を裏書するのである。

土を堀ることが深ければ水は到る處に湧き出る。自我に沈潜することが眞實であれば必普遍妥當的の正義を意識し得る。

正義は終局の勝利である。それは萬人の眞要求を代表する行動であり人間の榮えと向上との正しい標的への努力であるからである。

利己主義は萬人の眞要求を裏切る行爲であり單なる感覺的快樂の耽溺である物質に依役される生活である。それ故に利己主義は最後の没落である。

「子曰く君子は義に喩り小人は利に喩る。」

### 二二五 徳孤ならず必隣あり

自分一人豊富は物質を所有するに忍びない。自分一人安樂なるに忍びない。他人を憎むやうな情緒に堪へられない。他人を輕蔑するやうな態度に堪へられない。

斯うした心もちと態度とを以て終始する生活が徳である。人を愛するものは必人に愛せられ人を尊敬するものは必人に尊敬される。「徳として酬いられざるはなし。徳には必共鳴者があり賛助者がある。徳が直ちに酬いられると後に酬いられるとは時間の問題であつて「必隣ある」は徳そのものゝ必然性といつてよい。但し右の手で與へて左の手で奪ふやうな心もちと朝に蒔いて夕に獲んとする態度とは徳を距ること遠しといはねばならぬ。

### 二二六 自信、自重、自尊、自負

二五 徳孤ならず必隣あり 二六 自信、自重、自尊、自負、



自信とは道を信じて惑ひなきことである。人の毀譽褒貶を超越することである。孔子の所謂「我を知るものはそれ天か」の境地である。

自重とは自己の責任を重んずることである。自己の任務の重大なるを覺ることである。

自尊とは自己の人格價値に醒め他人の尊嚴を知ることである。

自負とは自己の天分を頼み才能を矜持することである。

孔子が門人漆彫開をして仕官せしめんとした時開は對へて「吾之をこれ未だ信ずる能はず」といつた。孔子は之を悦んだ。開が孔子の推薦にも拘はらず未だ自分分は仕官して道を行ふ自信を持たないと辭退したのはあまりに退嬰に過ぐるに似てをるが孔子は單なる自負によつて妄進せぬを取られたのである。

### 一二七 慾を寡くして氣を養ふ

一切の慾望はみなそれ〴〵に意味と價値とを有する。一として斷滅すべき理由

を見出さない。

禁慾の不自然なるは放縱の人間性を傷ふと同一である。故に極度に慾望を禁壓すればその反動として必耽溺と放縱とを免れない。禪宗の行者が花柳病に罹るやうな悲劇がここから生まれる。

向上の道は無慾と禁慾とでなく節慾であり寡慾であらねばならぬ。孟子が「心を養ふは寡慾より善きはなし」といつてゐるのはこの意味である。

寡慾とは主に性慾と食慾とを節することである。正義といひ浩然の氣といひ剛といふ如きは皆寡慾によつて養はれた充實感に外ならぬ。

「子曰く吾未だ剛者を見ず。或人對て曰く申根(門人)なり。子曰く根や慾(多慾)なり焉ぞ剛を得ん。」

### 一二八 人性は善であるか惡であるか

人間の本性が善であるか惡であるかといふ問題は古來議論の的となつてゐる。



孟子は人の性は善であると論ずる。人には生れながらにして惻隱、羞惡、辭讓、是非といふ四端即ち本然の情操が具はつてゐる。此四端を擴充すれば仁義禮智の成徳に到るのである。例へば今嬰兒が井に陥らんとするを見れば誰でも之を放任して置くに忍びない。即ち惻隱の心が起る。そうして井端へ駆けつて嬰兒を救ふに相違ない。この心もちと行爲とは人間性の自然の動向であつて決して嬰兒の父母の謝禮を目的とするでなく亦他人に譽められんとするでなく人から攻撃されるを恐れるが爲でない。自然に我心から湧いて來る止むに已まれぬ情緒である。これを以て人性の善であることが明であるといふが孟子の説である。これに反して荀子は性惡説を唱へる。人性は惡である。其善を爲すは偽であると説く。しかし荀子の偽りとは詐僞の意味でなく作爲の意であつて人間は氣まゝに放任すれば必惡に流れるものである。これに善を行はしむることは自然の傾向に反した作爲であるといふが彼の論である。荀子も決して人間を自然のまゝ惡に放任すればよいといふでない。禮を設け制度を作つてどこまでも人を善に導かねばならぬといふ

が彼の本意である。であるから、つまり孟子は動機と内容とに着眼し荀子は結果と形式とを重要視したのであつて歸すところは同一である。

或は人性は善惡相混すると説くものがあり又は性には善もなく惡もないと論ずるものもある。王陽明は「善なく惡なきは心の體。善あり惡あるは意の動。善を知り惡を知るはこれ致知。善を作し惡を去るはこれ格物。」といつて性善惡なしの立場を取つてゐる。

人間は愛することなしに生きてをられない。生命即愛であるといふ實感に立脚すれば愛すること即ち善を爲すことは自我の眞要求であり人間の本性であることは疑ふ餘地がない。たゞ其愛が純眞でないために惡みとなり怨みとなり争ひとなるのである。純なる愛の反面は必聰明な理知である。愛の熱と智の光とそれが生ける生命の眞相に外ならぬ。故に人間の性は善である。人間は善を作すために生れそうして生きてゐるのである。



## 二九 天は善人に幸福を賜ふ

天は善に幸福を賜ひ不善に禍を降すといふことは常識的に誰でも信じてゐることであるがその反對に善人が必しも幸福でなく不善人も時として幸福の生を送るといふ事實を認めて天道是非かの疑問を懐くことがある。

善人が幸福を享有することは夏は必暑く冬は必寒いと同じく必然的事實である。しかし夏日も時として寒雨が降り雹が降ることがないでなく冬日も時としては春暖の氣温を示さぬでない。それと同じであつて善人も時としては禍を受け不善人も時としては幸福の生活を送る。けれどもそれは極めて少數の例外であつて大體に於て善人が幸福を享け不善人が禍を蒙るは必至の事實と認めてよい。しかし、たとへ少數の例外であつても既にさういふ事實の存在する以上吾々は天が善人に幸福を賜ひ不善人に禍を降すといふ信條を今一層精査し探究する必要がある。さうするには先づ天とは何であるか、幸福とは何であるかといふ意味を

明かにせねばならぬ。

天は一切の存在の根原であり一切の現象の動力であり、あらゆる運命の支配者である。それは神といひ佛といひ實在と名づけられるものであつて、すべての相對に内在し且つ超越するところの絶對者である。

神は全く人間を超越した存在であるとは考へられない。少なくとも人間と内生命を通ずるものに相違ない。しかし人間そのものは勿論神でない。人間は神の子である。神の心を分有し神の生活を分擔するものである。

神の心は愛であり神の働きは生々發展である。愛することは善を行ふことである。故に善を行ふは神の意志の遵奉である。幸福とは精神の平和である。感覺の快樂である。生活の悦びである。希望の輝きである。

愛に充ちた善人は常に平靜な精神を所有する。そうしてあらゆる感覺—眼と耳と味と香と觸覺—に快美を感ずる。彼は如何なる境遇にあつても生活の悦と感謝とを失はない。彼は永遠の希望に充たされてこの一日を生活する。



故に孔子は「仁者は楽しむ」といひ「仁者は壽し」といはれてゐる。

子貢が「夫子の性と天道とは得て聞くべからず」といつたのは人間性の善なるを知り天が必善人に福するを信するは容易のことではない。單なる理智や解説でわかるものでなく至善を追求する熱烈な體驗によつてのみ天道を知り神を信ずることができるとの意味である。

### 三〇 終りを慎しむこと始めの如くせよ

處生に貴ぶところは終始一貫したる敬虔的態度である。

「子曰く晏平仲よく人と交る久しくして之を敬す。」人と交際するに始めは互に尊敬するけれど狃れるに従つて禮節を失ひ放漫になつて遂に絶交するやうになる。交久しうしていよく敬虔なる態度が望ましい。

人の性格は大抵初対面の時に顯はれる。しかしだん／＼交りを續けるに従つて箔が剝けて見劣りのせぬものは少ない。交るに従てますます／＼深みを感じゆかしさ

を覺える人が貴い。事業に志すものも始めは脱兎の如く終りは處女の如きが多い。一旦立てた政策を終りまで貫徹する政治家は殆希である。

「子曰く終りを慎しむ遠きは追へば民の徳厚きに歸す。」

### 三一 其言ふところは其行ふところ、其行ふ

ところは其志すところ

顔淵と季路と侍坐したとき孔子が問うた。各自の志を述べて見よ。

季路はいふ。自分が車馬又は輕裘のやうな財物を所有する場合朋友と共に之を使用して惜しむことなからんを願ふと。

顔淵はいふ。他人の善に對し之を贊助して少しも毀害することなく自己の爲すべき勞働を骨惜しみして他人に課することなきを願ふと。

子路が孔子の志を問ふ。孔子いふ。

老者をば安樂にし朋友は信にし少者には懷かれんと。

三〇 終りを慎しむこと始めの如くせよ  
三一 其言ふところは其行ふところ其行ふところは其志すところ



其言ふところは其行ふところであり其行ふところは其志すところである。單に高遠な理論を戦はせ空漠な想像に走らない。

子路は財物を以て人と墻壁を造るやうな吝な態度の毫もない生活を志した。顔淵は人の善を悦び人の樂しみを願ふ仁愛の生活を志した。孔の志すところは老少各其所を得て其生を樂しむを願ふのであつて社會を見ること一家の如き博大な立場である。

### 三二 敬に居て簡を行ふ

敬虔な心もちを以て簡大な態度を持する。

身を持すること嚴に人を待すること寛。

自ら責むること重く他を咎むること輕し。

言を以て勸め身を以て禁ずる。

### 三三 學ぶことの意味

學ぶとは傲ふことである。覺ることである。即ち先覺者の遺教を研究し其足跡を辿つて道を求め自得し自覺する意味である。

吾々が富める人に對するとき心の中にある反感が起らざるを得ない。彼は守錢奴に過ぎぬではないか。幸運兒に過ぎぬではないか。といつたやうな對抗的の心もちが生ずる。時としては生命の意義と價値とを知らざる黄金崇拜の徒よと叫びたい一種の嘲笑的氣分にさへなるのである。

又吾々が單なる地位高き人に對する時も、權勢の前に膝を屈する者よ、嚙りつき主義よといひたいやうな對抗的な心の状態になるのを免れない。

これと異り吾々が壯美なる行爲に接し又は崇高なる人格者の前に出る時は反感や對抗の心もちは全く去つてたゞ自然に頭が下り其人に引きつけられるやうな親しみと溫味と畏れとを感じて涙ぐましい感激にさへ打たれるのである。



これは何故であるか。吾々が行かねばならぬ道、登らねばならぬ頂は實に崇高なる人格壯美なる行爲そのものであるからである。この意味で吾々が古の聖賢を崇拜し生ける覺者に師事することは生命最高の要求を充たすのであつて學ぶとは傲倣であり覺悟であるとはこれに外ならぬのである。

學の究竟は人格價值を高めるの一事に繋り科學と藝術とはこれが素材としてのみ價值づけられる。孔子が學の一字に至大なる意味を認められたのはこれによるのである。

「哀公問ふ。弟子孰か學を好むと爲す。孔子對て曰く顔回といふものあり學を好み怒りを遷さず過を再びせず不幸短命にして死す。未だ學を好むものを聞かざるなり。」

「子曰く十室の邑必、忠信、丘の如きものならん。丘の學を好むに如かざるなり。」  
 「子曰く吾生れながらにして之を知るものに非ず古を好み敏にして之を求めたるものなり。」

「子曰く君子は食飽くを求むることなく居安きを求むることなく事に敏にして言を慎しみ有道に就て正すを學を好むといふべきのみ。」

### 三四 取るべきを取るは義である。與へて當を失ふは義でない

孔子の弟子子華が齊の國に使するとき冉子は子華の母の爲に扶持米を乞うた。孔子は六斗を與へよといはれた。冉子が増額を請うたので孔子は一石六斗を與へるを許された。然るに冉子は猶之を不足として十餘石の米を與へた。孔子がいはるゝに子華の齊に行くや肥馬輕裘といふ豪華な旅装を以て出發した。それ程彼の生活は富裕であるのだ。吾聞く君子は人の困急を救ふために財を吝まぬけれど徒らに富者の財を益すことを爲さない。弟子原憲が孔子の家宰となり九百斗の俸米を給せられた。原憲は廉潔寡慾な人間であつたので俸給のあまりに多額なるを辭退した。孔子はいふ。取るべきを取るは義である。もし餘りあらば汝の隣里郷



黨の貧人に施せばよい。辭するに及ばぬ。妄りに物を與へるは人を傷ふのである。それは取るべからざるを取つて自ら傷ふと同じ過失である。

### 二五 積善の家に餘慶あり積不善の家に餘

#### 殃あり

家―祖父、父、子、孫―といふ生活團を一貫して流れる目に見えない力。精神的財産はある必然性をもつた強いエネルギーである。

積善の家に幸福が多く積不善の家に禍が續くことはこの必然性に基くのであつて吾らが日常自己及周圍の人々の生活に於て目撃し立證し得らるゝ明かな事實とていうてよい。父祖の精神的遺産を繼承した子孫は常に幸運に恵まれ順境に立つて發展し之に反する場合には自己に高き天分を有するにかゝはらず意外の逆境に遭うて生涯沈淪するものである。それでは積不善の家に生れた人間はさうした運命に翻弄されて一生を必不遇に送らねばならぬのか。そこに個人の自由も運命の開

拓も認められぬのか。決してさうでない。自己の境遇、父祖の生活を凝視し熟考し自己の置かれた環境と運命とを洞觀することによつて其運命の網を切り開くことができる。そこに自我の自由があるのである。もし運命を洞觀するの自覺がなければ因果の網に捕はれたまゝ醉生夢死せねばならぬ。

概して父祖が優れた人物であれば子孫の人物は優秀であり父祖の人格が陋劣であれば子孫に陋劣な人物が生れる。しかし必しもさうでない。父祖の性格と境遇とが種々雑多に織り交つて子孫の性格を形成するのであるから單純に遺傳や教育を以て説明することはできない。

大抵父祖が人格者であつて社會的地位や待遇がこれに伴はなかつた場合其子孫は賢明で且つ幸運に恵まれる。父祖が人格者であつてもこれに伴ふ社會的地位及待遇を享有すれば其子孫はあまり賢明でなく又世に顯れない。

宋の王祐は太祖太宗に歷事し直道を以て容れられず自ら三槐を庭に植ゑて「吾子孫必三公となるものあらん。」と曰うた。果して其子王旦は眞宗に事へて宰相と



なつた。聖帝堯舜の子等は皆不肖であつた。英雄豪傑と稱せられる人々の子孫は概ね偉人でない。ワシントンやリンコルンの子が偉大であつたことを聞かない。舜の父は瞽瞍といふ頑固者であり豊臣秀吉やリンコルンの父は無名の凡人であつた。しかし彼等の母が賢明であり又父祖がたとへ才能と知識に於て天分が低かつたにせよ其性質が愚直であり朴訥であつたことは疑ひない。愚直の中には種々偉大性の萌芽が含まれてゐるものである。そして彼等は愚直なるが爲に常に割の悪い場所に廻されて一生を貧困に終らねばならなかつた。その壓迫された萌芽が時を得て勃興したものが凡人の子としての偉人である。

孔子の弟子仲弓の父は性格のあまり善くない人間であつた。しかし其子の仲弓は孔子に「南面(王位)せしむべし」と評せられたほどの立派な人格者である。そこで孔子は「犁牛(悪牛)の子驛かくして且つ角あらば(良牛)用ふることなからんと欲すと雖も山川(神の供物)それ之を捨てんや。」と曰はれて父の不善は其子の偉大なるを妨げぬ意味を明かにされた。

### 三六 運命を諦視すること

自己の爲すべきことを自覺しこれを爲すに純一であり得たならばすべての環境とすべての出来事とに對してその必然性を認め感謝を以てこれを迎へることが出来る。これが天命を知る境涯であり運命を諦視する生活であつて眞の自由はこゝから發足すべきである。

門人伯牛が癩病を患つた場合、孔子は之を訪問し伯牛の手を執つて命なるかな斯人にして斯疾あることはと嘆息された。孔子が悪疾のために人格者を失はんとするを悲しんだのは師弟の情として尤も然るべきであるが伯牛自身にあつてはその病苦の中に猶他人の覗ひ得ざる光明があり樂しみがあつたに相違ない。

眞の自由を他にして人生の悦樂はあり得ない。そしてそれは運命を諦視する生活であり天命を順受する境地に他ならない。この境地に達した人は貧困の中にあつて病苦の中にあつて他人から見ればいかに悲惨であり氣の毒であるやうでも其



人自身はそれによつてより高くより深刻に生活を享樂しつゝあるのである。それは苦惱によつて鋭敏にされた官能と純粹にされた意識とが然らしめるのであつて綱島梁川や正岡子規が十數年病苦の間にあつて高調なる精神と眞摯なる勇氣とを持續して彼等の藝術と宗教とを建設した態度を見ても明なことである。

「子曰く賢なるかな回や、一簞の食一瓢の飲陋巷にあり、人は其憂ひに堪へず、回や、其樂を改めず賢なるかな回や。」

### 三七 全我的力を盡すこと

全我的の力を盡すことが善であり仁であり愛であり道德である。他と力の大小を比較するのではない。自己としての全力を表現すればよい。全我的力とは一時的の努力でない。生涯を通じての底力のある努力である。單にあることがらに熱中するとは其趣を異にする。

冉求が孔子に向ひ先生の道を悦ばぬではない。自己の力が不足で精進が保てぬ

のであるといつた。孔子がいふ。力の不足なものは中途にして廢止するわけである。今汝は初めから區劃を立て、道に進まないのだからと。又嘗ていふ、たとひ一日でも其力を仁に用ふるものは容易に得られない。吾はまだ力の足らぬものを見ない。千萬人中或はあるかも知らぬが自分はまだそれを見ることがない。

### 三八 事業の成敗は人物にあり

事の成敗は人物によるのである。人物を得れば必成功し人物を失へば必失敗する。制度や方法は人物に運用されて其効果を顯すべきものである。人物を束縛するためには設けるものでない。運用の妙は一心に存する。但し人物は容易に得られぬから制度や方法を改善する必要も時としてないのでないが歸するところは人物の如何にあるを忘れてはならぬ。

殊に政治は人材を擧げるを急務中の急務とする。人材の要素は識見と實行能力とであるがその原動力として第一に要求せられるものは眞實性であり剛直であ



る。  
子游が武城の宰となつた。孔子は「汝人を得たりや。」と問うた。子游は對へた。澹台滅明といふ人物がある。彼は道路を行くに本道を行いて徑路を通らない。公事があるでなければ子游の室に入らない。私情を以て妄りに長官の室に出入して抜けがけの立身を企てる陋劣な人間とは全く異つた人物であると。

三九 知るものは好むものに如かず。好むものは樂しむものに如かず

「三歳の兒童も之を知る六十の老翁も之を行ふ能はず」とある如く倫理や修身の説法は尋常三年生でも大概は心得てゐる。單に知るのみでは何の價値もない。努力して之を行ひ、行つて之を好むに至り更に善そのものを樂しむ境涯にまで達せねばならぬ。王陽明が「知は行の始め、行は知の成れるなり。」といつたやうに實行して後眞の知となるのであるが現代の如く生活が複雑になり知識が多方面に分

化した時代にあつては先づ道德の何であるかを知ること即ち道德觀を樹立することが急要である。

道德觀を確立し藝術宗教政治教育に就て正しい概念を得ることは現代生活の緊急事である。ソクラテスが「眞に之を知るものは必之を行ふ。」といつたのはそのまま吾々の時代に適用せられる。

すべての思想は實行の必然性をもつてゐる。實行は努力の反覆であり努力の反覆は好みとなり好みの至りは樂しみの境地となる。樂しみの境地は「道我にあり」といふ自覺の生活である。

#### 四〇 幸福の要件

- 第一、常に平靜な精神を保つこと。
- 第二、逆境や苦難の中にあつても希望と光明とを失はないこと。
- 第三、一切の感覺―眼、耳、香、味、觸―に美と快とを感ずること。

三九 知るものは好むものに如かず好むものは樂しむものに如かず 一四三  
四〇 幸福の要件



## 第四、名譽と健康とを有すること。

右の要件を充たしむるものは仁愛の生活である。愛する心は常に充實感を伴ひ私慾に打克つ勇氣となり不義を惡む義憤となつて發する。しかもその平和なると春の海の如くである。

「子曰く君子は坦にして蕩々たり小人は長く戚々たり」「子温にして厲し、威にして猛ならず、恭にして安し。」「子の燕居申々如たり天々如たり。」

愛する心は人物を知るの明となり事物に處する識見となり智慧となり研究となつて現れる。それはあらゆる苦難の中にあつて希望と光明とを失はしめない力である。君子窮すれば通ず。小人窮すればこゝに濫す。」

愛に充ちた感覺は隨所に美を創造する。愛を以て天然に對すれば天然の美を感じ人間に接すれば人生美を感じる。香味觸覺の如きも愛によつて殊別な快美を感ぜられる。「子曰く知者は水を樂しみ仁者は山を樂しむ。」「子曰く疏食を飯ひ水を飲み脰を曲げて之を枕とす、樂亦其中にあり。」「子齊に在て韶(舜の音樂)を聞き

三月肉味を知らず、曰く圖らざりき樂を爲すのこゝに至らんとは。」「子曰く摯師の始、關雉の亂り、洋々乎として耳に盈てるかな。」

一時に名聲を高めんとするは虚榮であるが死後の名を惜むは人間性の要求である。愛は人の心に感激を興へる。この感激の積集が死後の名聲である。これが眞の名譽である。「子曰く君子は世を没して名稱せられざるを惡む。」

愛は生命本然の相である。愛することは生理本然の作用であり心理本然のはたらきである。故に愛の生活は天然の壽を全うする。「子曰く仁者は壽し。」

ある人々は愛の生活者のみが幸福を享けるといふ説を否定し仁者は壽しといふ事實に反駁を加へていふ。顔回は三十二歳で死し中江藤樹は四十二歳で死んだ。吉田松陰は三十歳で刑せられ藤田東湖は安政大地震で壓死を遂げた。九月一日の大震災に被服廠で焼死んだものが四萬人、彼等が悉く不善人であつたとはいはれない。善人が必幸福を享けるといふ説はこの事實を以て充分之を否定することができる。



この反駁は論者が天壽といふ語の意味をよく理解せぬための議論である。天壽を全うすとは其人間が死ぬべき時に死ぬことである。自己の爲すべきことを爲した後に死ぬことである。勿論それには長年といふ意味が含まれてゐるが必しも八十九十の年齢を重ねることでない。顔回は三十で死んでも孔子の高弟として充分に彼の生命の意味と価値とを顯した。中江藤樹は近江聖人として尊崇された。松陰や東湖は志士として彼等の正義を全うした。死すべきときに死んだのである。彼等として慥むべきところはない。

病氣で死ぬも天災で死ぬも死は同一である。人事と自然現象とを截然と區別することは不合理である。廣汎な意味に於て人事も亦自然現象に外ならない。被服廠で焼死んだ四萬人の中愛の生活者があり善人があつたならば彼等は必爲すべきを爲した人に相違ない。焼死は悲惨であるが、それは必しも彼等にとつて禍でない。天壽を全うして死すべき時に死んだならば病死と焼死と何の違ひもないわけである。ただそれ我利一偏自分の荷物の上に心を奪はれて焼死んだものがあるな

らば其人こそ禍であつたといふべきである。

#### 四一 中心生命を捕へること

中庸とは中心生命を捕へることである。妥協や折衷とは似て非なるものである。儉約は中庸であるがそれは奢侈と吝嗇との折衷とは全く異らねばならぬ。奢侈は浪費である。浪費は物質と精力の欠乏を來し欠乏は吝嗇となる。故に奢侈と吝嗇とは同一の心もちの現れとしての兩端に外ならない。

儉約は物質を支配する心の状態である。人を愛するがために物を愛することである。自他の人格向上のために物質を惜しまない。人格價值に立脚してのみ物質の價值を承認するが儉である。故に儉約は物質を使役する生活であり奢侈と吝嗇とは物質に使役される生活である。この意味に於て、あらゆる場合に處してその中心生命を發見し捕捉することが中庸であるからして中庸は實に至難であらねばならぬ。子曰く中庸の徳たるそれ至れるかな民能くすること鮮きこと久し。」とは



この謂である。

中庸を妥協折衷と心得て流俗に阿つた微温的の生活を是とするは見當違ひである。故に孔子は「中庸を得て之に與せずんば必や狂狷か。狂者は進んで取り狷者は爲さざるところあり。」といはれてゐる。狂狷とは高く理想を掲げて隋性と雷同との習俗に反抗するもの孤立自ら守つて他と妥協せぬものである。

#### 四二 先づ自己に最も近き一人の自覺の

ために働け

人を愛することは其人の眞の自由、自立、自覺のために力をつくすことである。それには先づ自分に最も接近せる一人のために、自己が現在對つてゐる一個の人間のためにわが心もちをつくすが肝要である。黒住教祖が「立向ふ人の心は鏡なりおのが姿をうつしてぞ見る。」と詠つたのは意味深遠である。

博く社會を救濟し民衆を自覺させることは願はしいことであり華々しい態度で

あるがさうした態度は往々にして宣傳倒れ説法倒れになり易い。

又自己が全く自覺し自由を獲て後に人の爲に働らくといふ態度は隱遁生活に終る恐れがある。矢張り自己の力相應に他の自由自覺のためつくすことが人と自己とを高めてゆく唯一の方法であらねばならぬ。

「子貢曰くもし博く民に施してよく衆を濟ふことあらば何如に。仁といふべきか。子曰く何ぞ仁にとゞまらん。必や聖か。堯舜もそれ猶之を病めり。それ仁者は己れ立たんと欲して人を立て、己れ達せんと欲して人を達す、よく近く取り譬ふ。仁の方といふべきのみ。」

#### 四三 復古と創造

生活は不斷の創造である。一日もそのまゝの繰返しを許さない。昨日の我は今日の我でない。今日の我は明日の我でない。吾々の身體組織は時々刻々と變化してゆく。精神作用も亦各瞬間に複雑化される。斯ういふ意味で生命は流動である



創造であると見るならばそれは肯定される。

しかし斯様な流動變易の根柢にある自我の自覺そのものは終始一貫したものである。肉體組織や意識内容が如何に變化しても自我の自覺は恒常不變である。それと同じ意味で人類の生活も科學の研究應用と器械の發明利用によつて益々分化し變化し複雑化していくけれど人類生命を一貫するところの正義と眞理とは時間を超越した永恆性を失はない。

そして斯うした正義と眞理とを體現した覺者哲人が科學文明によつてその出現を妨げられることは憂ふべき事實である。それで私どもが眞理の體得に向つて邁進する場合どうしても古聖賢の足跡を辿る必要があり復古的精神運動が要求せられるのである。

現代人によつて體現せられた古聖賢の思想、現代生活に復活せられた古典的眞理それがほんとうの創造である。一切の形式と典型とを打破して自ら新生命を創造するといふは傲慢な態度である。

型に入て型を脱するでなければ眞の創作は出来ない。國家生活でも團體事業でも常に其創造された精神の本源に遡つて之を復活せしむることが眞の革新であり創造である。基督教は猶太教から脱化した宗教であり佛教は婆羅門教から脱化したものである。孔子の道は堯舜を祖述し文武を憲章したのであつて「述べて作らず信じて古を好む」古を好み敏にして之を求めたり。」とは孔子が平素告白せらるゝところである。

この意味であらゆる時代を通じて創造される正義と眞理とは常に古典的精神の復活であり體現であらねばならぬといふことができる。

#### 四四 夢

莊周は夢に胡蝶となり孔子は壯年時代常に周公を夢みた。ある乞食は毎夜夢の中で帝王になりある帝王は毎夜夢の中で乞食になつた。

吉田松陰は夢の贊美者である。「懐かしい故人に逢つたり及び難い大事を成し遂



げたりするのは夢の世界だけだ」といつてゐる。夢は思ふことを夢みることがあり全く思はぬ奇怪な事物を夢みることもある。しかしどんな不思議な夢であつてもそれは必意識内の経験であるを否定するわけにゆかない。痛切なる志願は必夢になるものである。古歌に「思ひつゝ寝ればや人の見えつらん夢と知りせば醒めざらましを」とあるは事實である。

夢は自己反省の資料である。夢によつて自己の心境を批判し過を改め行を慎しむことができる。正義を追求するものは必邪惡の夢を見ない。王陽明は「夢は事の前兆である」といつてゐる。ある心境の人にあつてはかやうなことも肯定し得ると思ふ。

#### 四五 藝術の核心は道德である

技巧の背景には品性を要し人格を要する。單に技巧の末にのみ走つて人格の深みに根ざさない藝術は到底高い價值を齎すことはできない。「技神に入る」といふ

やうな妙境は一切を攝取し包容する態度の人格者のみが到り得る境地である。一切を包容する態度は愛の生活であり正義の生活であらねばならぬ。眞の人間のみが眞の藝術を創造する。徹底した道德の核心から偉大なる藝術は生れる。

「子曰く道に志し徳に據り仁に依り藝に遊ぶ。」

#### 四六 同情

「同情は弱者の武器に過ぎない。すべての罪惡は自己の弱さから發生する。強者たれ。同情すること、同情されることは畢竟無價值である。他人を踏臺にしてその上に自己を建設せよ。」これは超人を夢みたニーチェの妄想である。人生同情よゝ美しきはない。他人のよろこびを見て共に悦び悲しみを見て共に涙を流す。そこにまことの人生があるのだ。人の苦しみに見て獨り樂むに忍びない。人の悲しみを見て獨り安穩なるに堪へない。自分一人豊富な物質を所有するに堪へない。自分一人快感を恣にするに忍びない。斯ういふ心もちを外にしてどこに人間がある



か。同情を他にしてどこに人生の美を認め得るか。孔子は喪にある人の傍にあれば食に味がなくて飽食することができない。會葬された日には詩が歌はれない。これは一小事の如くであつて孔子の偉大を表す最も重要な一面と見られる。

#### 四七 經濟の意義

經濟の原則は最小の努力を以て最大の効果を獲ることであるといふ。一般的意味に於て斯うした要求は人間生活のあらゆる方面を通じて認められる。しかしこゝで問題となることは最小の努力といふこと、最大の効果といふこととの意味である。

生活は不斷の努力である。努力を外にして生命はない。最小なる努力と最大なる努力と其主觀的感じに於てあまり差異を見ない。たゞ大なる努力から小なる努力に移つた當時と小なる努力から大なる努力に移つた當時のみ或は勞苦を覺え或は安逸を覺えるに過ぎない。

吾々が最も愉快を感ずるは緊張した努力の後の心もちである。緊張した努力のみが自己を高くし強くし生命の價值を大にする。最大努力は一切の努力を超越する。無限の向上は生命そのもの、真相であり努力そのもの、本質である。天才とは常に最大なる努力を持続する人間である。

努力は努力そのものに價值があり意味がある。必しも効果を問はない。遊戯や藝術を見れば明かに知られる。此意味に於て最小の努力を標的とするは生活價值を縮小するものといはねばならぬ。

大なる効果とは大なる價值といふ意味であらねばならぬ。價值は必しも物質の質と量とによつて定まらない。客觀的の價值は物質の多寡精粗等を標準として判断されるのであるが主觀的價值はそれらの條件を超越するところに創造される。

十圓の金は客觀的價值としては一定である。米を買へば二斗木綿を買へば三反といふやうなものである。しかし同じ十圓であつても百萬圓の富豪が獲得した十圓と裏長屋の商人が儲けた十圓とはその主觀的價值に於て比較を超越した差異を



示すのである。

同一の人間にあつてもこの十圓の金を盗まれたり遺したりした場合と貧人に施した場合とは大なる價值感の相違が生ずる。贅澤に飽きた人間の前にあらゆる美食を列ねても當人はあまり美味を感せぬであらう。額に汗して勞働する人間にとつては一碗の飯も舌鼓である。この意味で眞の價值は主觀的なものであり主觀的價值の創造は自己の態度と心もちとに歸着するのである。それ故にほんとうの價值は努力そのものの中に發見される。最大の努力が最高の價值を創造するのである。

富によつて幸福を獲るは賢者のみである。金を蓄へて金の奴隸となり器械を作つて器械の奴隸となる。

足ることを知るものが眞の富者である。報酬を望まない勞働者は自己の脚下に地球を所有することを自覺する。

「子曰く富にして求むべくんば執鞭の士と雖も吾亦之を爲ん。もし求むべからず

んば吾好むところに從はん。」

「子曰く疏食を食ひ水を飲み脰を曲げて之を枕とす樂亦其中にあり不義にして富み且つ貴きは吾に於て浮雲の如し。」

#### 四八 人は皆吾師である

「三人行へば必吾師あり其善きものは之に從ひ其善からざるものは之を改む。」と孔子は訓へる。

求道精進の生活にあつてはすべての人の行爲は悉く吾師でありあらゆる事件と現象とは悉く自己創造の材料である。

#### 四九 無抵抗主義

トルストイは聖書の「惡に敵すること勿れ。」といふ教訓を無制限に擴充して無抵抗主義を提唱した。他人からどんな無理を仕向けられてもこれに抵抗せぬ。ど



んな暴行を加へられても柔順にそれを受けて敢て敵對しない。此態度を徹底してゆけばカイセルの様な帝國主義の侵略に逢つても防禦することもできない。暴客が來て親の首を取つてもだまつて見てゐるといふことになり甚非人情な主張になる。しかし惡を以て惡を救ふことはできない。對象はすべて自己の反映であるといふ立場から出發したならば無抵抗の態度はたしかに第一義の生活であらねばならぬ。

曾子は「能を以て不能に問ひ、多きを以て寡きに問ひ、あれども無きが如く盈れども虚しきが如く犯せども校らず。」といつてゐる。慢心と成心とを去つた謙虚無私無抵抗の態度、そこから踏出した第一歩こそほんとうの自由であり創造であるべきである。

## 五〇 瞬間 享樂

一切は流轉である。變化である。無常である。空である。世界には一として常

住のもの永恒のものはありません。生けるものは死滅し盛なるもの衰へる。歡の後には悲哀が來り樂しみがあれば苦しみが伴ふ。幸の蔭には禍が待つてゐる。此世には眞理もなく理想もない。つきつめて見れば一切は虚無である。疑問である。たゞこの瞬間を享樂するより外に生きる方法は無いではないか。……斯うした考はたしかに吾々の内的要求の一面を代表した思想には違ひない。

社會の人々の行爲を見ればクダラナイことが多い。大ていは金の爲物質のために頭を下げたり威張つたりお世辭笑ひしたり泣いたり喜んだり争つたりするに過ぎない。ほんとうにクダラナイ。價値がない。それでは自己自身の行爲はどうであるか。矢張り人と同じクダラナイ生活である。しかし斯様に他人や自己の行爲を觀察してクダラナイと批判するにはどうしてもそこに何かクダラナイもの價値あるものがなければならぬ。それでなければ、クダラナイと批判する根據が無いわけである。一切が虚無であるといふならば虚無であるといふ斷定そのものも虚無でなければならぬ。それ故に一切が無價値であり虚無であると云ふ主張はつまりそ



の根柢に於て自己の立場を失ふものである。

吾々の生活には眞理があり理想があり絶対價値があらねばならぬ。吾々は束縛された不自由な虚偽で固められた生活、暗い穴の中へ引き込まれるやうな生活を脱して光明に充ちた感謝に溢れた生活、水の流れる如く雲の行く如く林の靜なる如く風の疾き如く凝滞なく束縛なく圓轉濶達自由解放の生活を創造せんと欲する。それが吾々の理想であり眞理であり價値である。そうしてそこにこそほんとうの意味の瞬間享樂刹那満足が實現されるのである。

仁の理想の追求はこの濶達自在の生活を標的とするのであつて「子四を絶つ、意なく必なく固なく我なし。」とはこの境涯としての孔子の生活を表現した言葉である。「意なし」とは利害禍福を打算計較することのないこと、「必なし」とは事の効果を豫期して之に執着せぬこと、「固なし」とは一己の見解を固守する頑迷な心もちのないこと。「我なし」とは我利私慾にかゝはらぬことである。

## 五一 基督教を信ずる友に

お手紙拜誦、仰に従ひ羅馬書讀み復しました。しかし私のこれに對する見解は八年前貴兄と手塚先生の處で聖書の講義を聞かせて貰うた時と根本に於て少しも異らぬのであります。要するにその取るべきを取り捨つべきを捨て信すべきを信じ疑ふべきを疑ひ肯定すべきを肯定し否定すべきを否定することが私の一般既成宗教に對する態度であり亦從て基督教に對する態度であります。

羅馬書を讀んで私の取るべき點肯定すべき點は大要次に記す第一項の思想又は之に類する訓へであり棄つべく疑ふべく否定すべきところは第二項の下に書きつける思想及びこれに類似した意味のことばであります。

第一項「ロマ書第二章」六神は人の行に循つて各人に其報を爲すべし。七耐忍て善を行ひ榮光と尊貴と不朽壞とを求むる者には永生をもて報いん。八、九、然れども争闘をなし眞理に順はず不義につくものには報いるに忿りと怒と艱難辛苦とを



以てす。こはユダヤ人を始めギリシヤ人凡て悪を行ふ人に及ぶなり。一〇 ユダヤ人を始めギリシヤ人凡て善を行ふ人には榮光と尊貴と平康を以て報ゆべし。一これ神には偏視なければなり。一二 凡そ律法なくして罪を犯せる人は律法なくして亡び律法ありて罪を犯せる人は律法に照て審判を受くべし。一三、神の前に義とせらるゝは律法をきく者に非ず義とせらるゝは律法を守るものなり。：

第二項「第三章」二〇、この故に律法の行に由て神の前に義とせらるゝもの一人だにあることなし蓋律法に由て罪は知らるゝなり。二二、今律法の外に神の人を義とし給ふことは顯れて律法と豫言者とは其證をなせり。二三、即ちイエスキリストを信するによりて其義を神は凡ての信者に賜うて區別なし。二四、そは人皆既に罪を犯したれば神より榮を受くるに足らず 二四、ただイエスキリストの贖ひに頼りて神の恵みを受け功なくして義とせらるゝなり。……二八、故に我おもふ人の義とせらるゝは信仰に由て律法の行に由るに非ず。……

「殺す勿れ。盜む勿れ。姦淫する勿れ。惡に敵する勿れ。汝の如く其隣を愛すべし。」といふ律法を徹底的に行ふとして、女を見て色情を起すものは中心既に姦淫したるなり」といふところまでつきつめて反省したならば誰でも罪のないものはない「世に義人なし一人もあるなし。」といふ結論に到達せざるを得ません。しかしそれだからこの罪がイエスキリストの復活を信じ贖罪を信することによつて救はれねばならぬといふことは理性の判断として肯定されぬのであります。

すべての人間は罪人である。自分の行や努力を以て救はれることのできない罪のかたまりである。キリストは全く罪のない人間である。そのキリストが罪なくして十字架にかゝつたは萬人の罪を神の前に贖つてくれたのであるといふ。けれどもその「すべての人間は罪人である、キリストは罪なき人である」と断定するものは誰であるかそれは聖靈が左様に感せしむるのである。その聖靈とは自己の中にあるか、或は自己の外にあるか。私は思ふ。聖靈は神の本質であり亦自己の



本質である。それは自己の罪過どんな些細な罪過までも照し出す光であるが故にこの罪を超越する力である。聖靈は律法を生むところの母であり律法の出づるところの源である。そしてキリストを信じて崇拜し追隨するはたらしきも亦自己の中なる聖靈に外ならぬと思ふのであります。

聖靈は愛であります。永生とはキリストの復活を信することであり肉に死して靈に生れることである。と説かれませんが愛の本質は肉に死して靈に生れるはたらしきに外ならぬと思はれます。愛は犠牲により死によつて其力と實在性とを強くし明かにします。此意味に於て私どもの聖靈生活愛の生活は生きてをる間よりは寧ろ死んだ後の方がほんとうの生活であると見ねばなりません。私は父の生きてをる間は遠く遠れてをれば時としては父のことを思はぬ日もありましたが父が死んだ後は一日として父のことを思はない日はなく夢に父を見ることは生きてゐた時よりも數多くあります。これを以て見れば親は死によつて真にその子の中に復活するに違ひありません。愛は死して復活します。最も醇化した愛の生活者、最も

崇高な人格者としてのキリストが死によつて最も明かに弟子等の目の中に耳の中に、はた心の奥底に復活されたのは何の疑も要せぬことと思はれます。私どもは皆復活します。愛の生活の高さと深さとに従つてそれ相應に皆死して後復活すべきであります。此の眞理を疑ふは白きを見て黒しといふよりも謬つた判断であるといはねばなりません。

私どもの生活にはたしかに贖罪の事實が存在します。犠牲と献身との意味は贖罪に外ならない。人間生活の平和と向上とは皆先覺者の犠牲献身としての贖罪が要求されてゐます。

明治維新は吉田松陰、西郷南洲等多くの志士の贖罪によつて建設されました。私どもは父母や祖先の贖罪によつて幸福な生活を送つてゐます。自分の今日の生活は皆親のめぐみである。先輩諸氏のめぐみである。先覺先聖のめぐみである。信ずるときに私どもはいひ難き感謝に打たれます。そうして無條件で他の爲にはたらしきたいといふ要求が湧いて來ます。自分は神から恵まれてゐる。自分の將來



の生活については何の不安も恐れもないといふ信念がなかつたならば、どうして私どもはこの一日を歡んで生活することができませう。

此意味で私は復活を信じ贖罪を信じます。そうしてそれをキリストの名によつて信ずることを必ずしも否定しません。しかしキリストの名によつて信ずるでなければ信仰もなく宗教もなく救済もないと見るならば私はそれを偏見であると思ふのであります。私は人間の生活を罪惡のかたまりであると見ないで寧ろ愛に充たされてをると認めるのであります。嫉妬や憎惡や怨恨は矢張り愛から生ずるのである。盲目的の愛情が嫉妬や争闘を起すのである。愛は愛自身の發展としての理性の光に導かれて醇化せられねばならない。愛と理性とは別なものでない。愛を離れて理性はなく理性を離れて眞の愛はあり得ない。それ故に愛を外にして神はなく理性と矛盾した信仰は正しい信仰でないと思ふのであります。愛が理性によつて照され導かれることは恰も私どもの身體がそれ自身の發展としての眼耳鼻舌などによつて意義ある活動、ほんとうの生活ができると同じである。しかし純

粹の生理的立場から見れば耳や眼よりも心臓、肺臓、胃腸の作用の方が根本であるといはねばならぬ如く人格價値の立場にあつては理性よりは愛情を根本であると認めねばならぬと思はれます。

理智を以て照された愛の生活の透徹。そこに神があり信仰があるのであつて私どもの要求する宗教の意味はこの範疇を出てぬのであります。

親鸞は「善人なほ以て往生す、いかに況や惡人をや。」と叫んで惡人成佛の機を説き他力救済を高調されましたが私どもは先づ自ら責め自ら鞭つて絶対に他人を責め他人を咎めない境地にまで自己を高めるべく努力せねばなりません。

此境地に到達せずして罪惡觀を説き他力信仰を説き神の救済を求むるは輕率であり利己主義であると思はれます。五年や十年の向上的努力を以て「到底自己の行によつて救はれる道はない。他力信仰でなくてはだめである。」といふ如きは謙遜でなくして寧ろ怠慢であらねばなりません。

力の限り生命の限り人の爲社會の爲に同情し奮闘する以外に道もなく信仰もな



く救済もなく幸福もないと思ふのであります。十九日の午後林さんに伴はれて手塚先生の宿を訪ね八年振りの懐かしい警咳に接するを得ました。席上に先生同級の友伊藤某(帝大出身)といふ人が居られ思想問題に就き快談しました。先生は多く語られず私の道徳聯盟趣意書(校正中のもの)を見て是非一部送つてくれといはれ私が「何人とも妥協せず一人立ちで行かう」といつた言葉に對して「白は白黒は黒で真にその個性を發揮させるがキリストの教である。」といはれました。

貴兄の鞭撻に勵まされてこの長文を認めました。

孔子は「朋あり遠方より來る亦樂しからずや」といはれました。舊交を温めるほど楽しいことは私どもの生活には他に何もありません。私は貴兄が羅馬書第十六章の十七「兄弟よ我なんぢらに勸む。凡そ爾曹が學べる所の教に反きて争ひ分にせ又躓かする者を視とめて之を避けよ。」の言葉を貴兄と私との親しい關係にまで必應用せられないことを信じて貴兄の求道精進を祈り上げます。

## 五二 大 望 心

豪華な邸宅。華美な衣食。高貴な地位。時代の流行兒。それらの對象に憧れる小さな野心を振りすて、自己を宇宙大にまで擴張するやうな大望心を懷きたいものだ。誰やらがいつた。報酬を獲んとする心を外にして立て。そこに自分の脚下に全地球が轉つてをるではないかと。

金を欲しい。美人を欲しい。評判を欲しい。長壽が得たい。そんな夢のやうな雲をつかむやうな、砂上樓閣のやうな欲求は一切隅の方へ片つけてしまはふ。

睨み合ひやいがみ合の種はもうサッパリと猫や犬どもに譲渡さうではないか。新らしい時代は近づいた。それは包容の時代、統一の時代、融合親和の時代である。

科學と器械との桎梏から離れて人間が科學を驅使し器械を使役する社會。あらゆる權勢と虚偽と慢心とを脱して人類が手を携へてこの一日の生活を真に享樂する。



る社會。共榮共存の時代は近づきつゝあるのだ。

仰いで大空を見よ。星辰と太陽とは神の表現ではないか。俯して地上を眺めよ。山岳と河海と一切の生けるものとは皆神の表現に外ならない。これを知りこれを信ずるが故に人間は神の子の榮光を荷ふのだ。

蝸牛角上の野心を去つて自我を無限大に擴充すべく大望心を養ひ育てよ。

無限の時間。無限の空間。あゝ五尺の肉體。百年はわづか三萬六千日ではないか。

一瞬をして一年たらしめ、一日をして百年たらしめ、一年をして永恒たらしめよ。

一切の苦惱と憂愁と悲哀とを美化し藝術化する愛の力、理知の光。眞摯に、純一に、たいこの光と力とを追求せよ。

あゝ新時代の建設のために奮ひ立たせたいものだ大望心。

「子曰く三軍帥を奪ふべし。匹夫志を奪ふべからず。」

### 五三 食慾と性慾

人間の生活を靈と肉との兩方面に分け靈を貴んで肉を賤しみ肉の要求を否定して靈の要求を充すことが人間の道であるといふやうに考へたのは一般に過去の宗教及道徳の思想であつた。斯うした觀方は徹底的意味では肯定することのできない思想であるにもかゝはらずなほ人間生活にある警告を齎らす力を失はないのである。

生活の基底は食慾と性慾とである。一切の社會問題—人口問題、勞働問題、婦人問題—の根抵に横はるものは食慾と性慾とである。あらゆる思想問題は之を露骨に説明すれば人間の性慾と食慾とを如何に解決すべきかといふ問題に化粧を施したものに外ならない。

人間がもし全く食慾と性慾とを否定し得たならば一切の問題は直ちに解決される。それは人類の絶滅を意味するが故に。しかしそれは生命本然の相に逆行する思



想として肯定することはできない。

けれども人間は「肉を否定して靈を生かさねばならぬ」といふ警告に、ある意味の尊嚴を認めざるを得ない。こゝに食慾と性慾とに關する慎重なる内省と考察とが要求されるのである。

「人常に菜根を咬み得ば百事成る。」と昔の人はいつた。

トルストイは菜食主義を唱へ大禹は帝位にあつて惡食に甘んじた。粗食は決して健康を害しない。禪宗の僧侶は粥を食つて坐禪をする。それでも彼等の身體は頑健である。山籠の行者には蕎麥粉を水に溶かして飲むだけで一千日を過すものがある。かやうにして鍛へられた人々の身體は外界に對して驚くべき抵抗力を具へてゐる。殆生涯病氣に罹らぬやうな實例がある。

「三度の飯を美しく味ふことのできるものはえらい人間である。」とある人がいつた。面白い言葉である。充實した氣分と愉快な心もちを以て日々を生活するてなれば三度の食に舌鼓を鳴らすことはできない。

西郷南洲は食物に就て嘗て不平を言つたことが無かつたといはれてゐる。乃木希典は焼芋が最好物であつた。どんな食物でも必甘く味ふには絶対に間食を止めること、酒、煙草を廢すること、食後一時間休息することが形の上の條件として必要である。

食慾よりも更に難解の問題は性慾である。飛翔する仙人が流れに下りて洗濯をする若い女の脂ぎつた脚を見て通力を失つて天から墜落したことを描いて兼好法師は讀者を笑はしめた。仙人に通力を失はせるものは性慾である。無節制なる性慾の前には藝術も哲學も信仰も個性も人格もすべてが滅茶々に破壊されてしまふ。

出来るだけ長く童貞を保つこと。最小限度に性慾を節すること。これが人類の眞の自由にまで向上する力の源泉である。

## 五四 人間味



孔子が六十九歳の時門下の天才顔回が三十二歳で夭折した。孔子は之を哀しんで「天子を喪ぼせり、天子をほろばせり。」と痛悼されそうして「之を哭して慟ず」號泣して態度を取亂されるに至つた。從者が「子慟す。」孔子様でも斯様に態度を取亂すやうな哀しみをされるのかといつたので孔子は「慟することありしか彼の人の爲に慟するにあらずして誰の爲にせん。」といはれた。七十といへば頽齡である。多くのものは貪慾になつたり枯木死灰のやうになつたり、それでなければ解脫超越して全く人間離れする頃であるが孔子の生活はどこまでも豊かな人間味を失はない。熱い血と涙とに充ちてゐるところが偉大であつて且つ懐かしく思はれる。

### 五五 共産主義

土地は天物である。個人又は一部階級者の占有すべきものでない。ある個人は廣大な土地を私有しある個人は蹠を容れる土地すら所有せぬことは無論不自然であり不合理である。

貨幣は財貨交換の仲介者たる以外独自の價値を有すべきでない。貨幣それ自身に絶對の價値を認め貨幣を蓄へ剩へ人に貸して利子を取る如きは謬つた習慣であり不自然な現象であらねばならぬ。

資本家が事業を興して人を雇傭し長時間労働させて少額の給料を拂ひ、それによつて自分の腹を肥すことはマルクスの剩餘價値説を研究しなくても常識で判断すればそれが不當であることは明かである。

土地を公有にしすべての生産機關を共有にし一切の財貨を均等に配分することは共榮共存を目的とする人間生活の理想であることは何人も否定することはできない。此意味で共産主義の議論は議論としては科學的根據を有する。しかし何人が如何なる方法を以て現在の資本主義を撲滅して共産主義の社會を建設し得るか。血を流し財を殲して資本制度を破壊し、さて如何にして新社會を建設し維持して行くか。問題はこれである。こゝに難關が横はるのである。單なる外的革命によつて人生は一歩も幸福を進められない。



共産主義を唱へる人々は先づ第一になぜ資本主義の社會が實現されたか貧富の懸隔が甚しくなつたかを探究する必要がある。病根を見究めて後に徐ろに治療の方を講ずるが良醫である。

自分一人快樂を恣にしたい。自分一人權勢を貪りたい。そういふ利己心が形れて資本主義の弊竇となり貧富の懸隔となつたのではないか。この利己心の根源に遡つてほんとうの治療法を發見することが共産主義建設の第一歩であらねばならぬ。單なる富により物質によつて眞の幸福は獲られない。疏食を食ひ水を飲み脛を曲げて之を枕としても其中に無限の楽しみがある。清貧の生活に幸福はある。經濟の根柢に道徳があり物質價値の核心に人格價値の嚴存するを自覺し確信せしむるが社會改造の根本問題である。この問題が解決すれば經濟問題は極めて順調に解決される。人格價値の自覺のための一手段として經濟組織の改革は意味を有する。しかしそれはどこまでも社會政策として行はるべきであつて決して直接行動や階級争闘として許さるべきでない。惡を救ふに惡を以てするは間違である。

争闘から愛は生れない。權勢の對抗によつて相互扶助の社會を生み出すとするは空想である。

## 五六 死

綱島梁川は二十歳の頃から十數年肺病を患つた。常に病床にあつて死に直面しつゝ哲學宗數の研鑽に没頭した。彼はいふ。信仰の生活には死がない。自分が死の恐怖に捕はれ死の豫感に煩はされる時は求道的態度の弛緩した時である。自己の空虚な時である。眞に充實した精進は死を超越する。と。生物には死がある。生れた以上死は必免れざる運命である。死は悲哀であり苦痛である。いくら諦めて見ても死の悲哀と寂漠から解脱することはできないであらう。それでよいのである。死が悲哀であるが故に生くることが嬉しいのである。どんなに苦勞でもよいかから此世に生きてゐたい。死ぬことは嫌である。そこに生命の價値があるのである。もし人間に死がなかつたならば生の倦怠に堪へぬであらう。私どもは一人



として死の經驗をもつものはない。故に死そのものに就ては何人もこれを經驗的事實として語る權能を有せない。たゞ私どもが死の豫感として恐怖するは瘦せかけた青ざめた硬くなつた肉體が棺の中に横へられて灰となり煙となり土となつてしまふ隣人の死を自己に移入した想像そのものに外ならない。孔子が「未だ生を知らず焉ぞ死を知らん」といはれたのは意識活動の一部としての死の豫感に没頭して全體としての意識の調和統一を傷つてはならぬことの意味を示されたものと思はれる。分裂によつて蕃殖する單細胞動物には必然的運命としての個體の死がない。しかし人間は死によつて現在の形態と意識とを有する個體としての自我の消滅するを否定することはできない。

けれども私どもは死によつて自我が全く滅亡するものと思はない。それは子孫として自我のあるものが延長せられ又人類全體として自我の何ものか存續することを認める。それにもかゝはらず私どもはなほ死によつて失はれる自我の何ものかを償はうとする深き要求を直覺する。生活の意義と理想とはこの要求の積極

的方面であつてそれは人格と思想とに絶對價値を認めるところの愛の擴充である。

### 五七 批判の標準

閔子騫は沈黙の人であつた。孔子は之を稱揚して「彼の人言はず、言へば必中ることあり。」といはれた。南容は日々白圭の詩を三復して言語を慎しんだ。孔子は南容の人物を見立て、其兄の子を以て之に妻せた。

言語に就ては孔子は多辯を斥けて寡黙を嘉せられた。

子貢は才高く見界が廣い。子夏は信實であつて規模が狹小である。孔子はこの二人を評して「過ぎたるは猶及ばざるが如し。」といひ二人を同等の人物と見られた。

冉求は季氏の宰となり聚斂して季氏の富に附益した。孔子は之を非難して「吾徒に非るなり小子鼓を鳴して之を攻めて可なり。」といひ下を貧しくし上を富ます



ことの政治的罪惡なるを明かにした。

### 五八 同生同死の交り

孔子が匡人の危害を脱して同行の人々の身を案じてをるとそこへ顔淵が駆けつけて来た。孔子は顔淵を見て歡びに堪へない。「吾汝を以て死せりと爲す。」といった。顔淵は對へた。「子在す回何ぞ敢て死せん。」

顔淵が死んだとき孔子は「天子を喪せり天子をほろぼせり。」と痛嘆し哭して働した。

孔子は嘗て顔淵に謂うた。「之を用ふれば則ち行ひ之を捨つれば則ち藏す、たゞ吾と汝とこれあるか。」

共に生き共に死なんと希ふ交り。これよりも美しい人生がどこにあるか。これよりも貴い藝術がどこにあるか。

西郷隆盛が月照と相抱いて薩摩灣に投身した。それは美しい藝術であつた。

明治大帝を慕うて死んだ乃木將軍。將軍に殉じた夫人靜子。それは最も美しい人生の象徴であつた。

赤穂四十七士の忠死それは永遠に偉大なる藝術的價値を失はない。

同じく生き同じく死するの願ひ。それは最も大なる感激であり最大なる價値であり最大なる幸福である。

しかし私は有島某の情死や野村某の心中を讚美するものでない。親を捨て子を捨て、他人の妻と情死すること。妻子を離れて人の娘と心中すること。そういう恨みとなげきと争ひとの渦きの中に死んで行くことは私の意味する同生同死の願ひでない。有島某野村某乃至多く情死する男女がもし彼等が生きてゐたならば果して二人が死を共にするだけの熱愛を持續して生活すことができたらあらうか。此意味で私は孔子顔淵が死を共にせんとする心もちに限りなき崇拜をさしげると同時に世の男女が情死を企てる心もちを憫れみ否定するものである。



## 五九 世界同胞の觀念

司馬牛が兄弟の無いを憂へて「人皆兄弟あり我獨なし。」と嘆息した。子夏は之に應へていふ。「商之を聞く、死生命あり富貴天にありと。君子敬して失なく人を恭しうして禮あらば四海の中皆兄弟なり。君子何ぞ兄弟なきを患へん。」兄弟の間は情が密接なるだけそこに利己主義の成長し易いものであり互の性格に共通の缺點を持てるために往々反目を免れぬものである。兄弟の間にあつて眞に利己主義に打克つことができたならば世に處し人と交つて必圓滿にいくに相違ない。人より少しく多く勞し少しく寡なく利し、人に一步を譲り一言を謙する。斯うした心もちと態度とを推し行へばどんな場合どんな人間に對しても必親睦される。必しも肉親の兄弟に限らない。

すべて人間を信じ人間に信用を置くことが肝要である。心に假裝敵を描き鎧冑で身構へする格好をして單なる物質と經濟のみを以て生活を解決せんとするは生

命の根本に觸れぬ行き方といはねばならぬ。

## 六〇 政治の第一要條は民衆の信を得ること

ことである

子貢が政治の要條を質問した時孔子は財政を豊にすること、軍備を整へること民衆の信を得ることの三個條を擧示した。子貢が「もし止むを得ずして一個條を去る場合あらば何を先にすべきか。」と問うた。孔子は軍備を去れと答へた。更に子貢が「己むを得ずして去らば残りの二ヶ條の中何れを先にするか。」を問ふ。孔子は答へた。「財政を去れ、死は人間の必然的運命である、たとへ財政困難のために民衆が餓死に迫るとも猶信を失ふよりは勝つてをる。」と。

## 六一 戀愛に就いて

問「女子と小人とは養ひ難し、之を近づぐれば則ち不遜、これを遠くれば則ち怨

五九 世界同胞の觀念 六〇 政治の第一要條は民衆の信を得る 一八三  
ことである 六一 戀愛に就いて